

国際交流
に係る
手引き 



本誌の目的、事例集の見方 3

I 交流開始のプロセス

国際交流の意義／国際的な学校間交流の意義／
国際交流の教育的効果／姉妹校提携等国際交流の現状、課題／
姉妹校提携・交流開始に至るまでの流れ 4
姉妹校提携・交流開始に至るまでの流れ(例) 6
安全管理に対する準備 7
国際交流の現状を知る 国際交流の現状(姉妹校提携)、
国際交流の現状(送り出し) 8

姉妹校提携の活動事例

愛知県立豊田北高等学校 10
千葉県立柏南高等学校 11
千葉県立長生高等学校 12
世田谷学園中学校・高等学校 13
麴町学園女子中学校・高等学校／秋田県立能代松陽高等学校 14
共立女子第二中学校・高等学校／国立明石工業高等専門学校 15

姉妹校提携締結の際の契約書見本

英語 16
中国語 18
韓国語 19

II 交流先の国の状況

国別基本情報

オーストラリア 20
ニュー・サウス・ウェールズ州 21
ビクトリア州 22
北谷町立北谷小学校／沖縄県北谷町教育委員会 23
クイーンズランド州 24
成城中学校・高等学校 25
ニュージーランド 26
東洋大学附属牛久中学校・高等学校 27
アメリカ合衆国 28
カナダ 29
ブリティッシュ・コロンビア州 30
広島県立祇園北高等学校／三輪田学園中学校・高等学校 31
広島県立西城紫水高等学校／北海道広尾高等学校 32
アルバータ州 33
イギリス 34
五條市立北宇智小学校／大河原町立大河原南小学校 35
台湾 36
広島県立宮島工業高等学校／千葉県立松戸国際高等学校 37
マレーシア 38
東京都市大学附属中学校・高等学校 39
韓国 40
開智中学校・高等学校／札幌静修高等学校 41
その他の地域
啓明学園中学校高等学校／秋田県立能代松陽高等学校／
昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校 42
秋田県立能代松陽高等学校／富士見丘中学高等学校／
昭和女子大学附属昭和高等学校／東京農業大学第一高等学校 43

III 交流の種類

文化交流の事例 44
晃華学園中学校・高等学校 44
実践学園中学・高等学校 45
京華女子中学校・高等学校／足立学園中学校・高等学校 46
札幌静修高等学校 47
開智中学校・高等学校／新潟明訓中学校・高等学校／
京都府教育委員会 48
城北学園 城北中学校・高等学校／城北埼玉高等学校 49
スポーツ交流の事例 50
能代市立能代第一中学校／大仙市立大曲中学校 50
桐生第一高等学校 51
科学、ものづくり交流の事例 52
群馬県立桐生工業高等学校 52
和歌山県立田辺工業高等学校 53
広島県立広島工業高等学校 54
オンライン交流の事例 55
秋田県立能代松陽高等学校／五條市立北宇智小学校 55
国際貢献交流の事例 56
新潟清心女子中学・高等学校 56
啓明学園中学校高等学校 57
授業体験・大学視察交流の事例 58
日本大学豊山中学校・高等学校／京都府教育委員会 58
海城中学校・高等学校 59
東京都立杉並総合高等学校 60

IV 受入れについて

受入れの実態 61
受入れ交流の事例
諏訪市立湖南小学校／伊那市立西箕輪小学校／
小野学園女子中学高等学校／成城学園中学校 62

V 問合せ先一覧

交流スタート時の問合せ先一覧 63

国際交流に係る手引き

はじめに

本手引き書は、姉妹校提携をはじめとする国際交流に関する手続きや現在行われている交流の実態、相互交流の受入れ先国である外国大使館や政府観光局窓口の相談機能、各国の教育制度、学期制度、受入れに際しての要望などについて記載しています。

本書は、生徒にとって最も身近な生活環境の一つである学校において、外国との交流機会の拡充を推進し、更なる学校間交流の実現を目的とします。

本書が、オリンピック・パラリンピック教育の「世界ともだちプロジェクト」などの様々な国際交流の活性化にもつながることを期待します。

事例集の見方

事例集の見方

学校名 (所在地/運営形態)

交流校名 (国/所在地)

交流の主な内容

交流による効果

効果測定方法

発展例

交流の方法

交流の手段

交流の方法

交流の手段

アイコンの見方

- 送付型
- 受入れ型
- 相互型
- 文化
- スポーツ
- 科学・ものづくり
- 国際貢献
- オンライン
- 授業体験・大学視察

取材協力 (五十音順)

- 在外公官** アメリカ大使館、オーストラリア大使館、オーストラリア領事館、カナダ・アルバータ州政府在日事務所、カナダ大使館、韓国観光公社、クイーンズランド州政府駐日事務所、在日カナダブリティッシュ・コロンビア州政府事務所、台湾観光協会、台湾観光局、ニュー・サウス・ウェールズ州政府事務所、ニュージーランド大使館、ビクトリア州政府東京オフィス、ブリティッシュ・カウンシル、マレーシア政府観光局
- 教育委員会** 秋田県教育委員会、大阪府教育委員会、京都府教育委員会、長野県教育委員会、新潟県教育委員会、広島県教育委員会

I 交流開始のプロセス

1 国際交流の意義

グローバル化は、経済、学術、文化等、様々な分野で進展し、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催を契機にその流れは一層加速することが予想される。

国際交流を推進することは、英語をはじめとする実践的な語学力の向上だけでなく、体験を通じた豊かな国際感覚や多様性を受け入れる態度の醸成、また日本人としてのアイデンティティの涵養^{かんよう}など、グローバル化の日常化、多様化が進展する社会に求められる資質・能力を育むための重要な方策の一つである。

2 国際的な学校間交流の意義

国際交流にも様々な手法があるが、海外の学校と学校間交流を行うことは、特定の学校と、組織的に中長期にわたって活動を継続できることから、

①スケジュールや活動内容などの具体的事項について、相互に希望を調整しながら計画・運営することで、円滑な実施と高い効果が期待できること。

②事前・事後学習等を取り入れることで、学習効果を深化・発展させることができること。

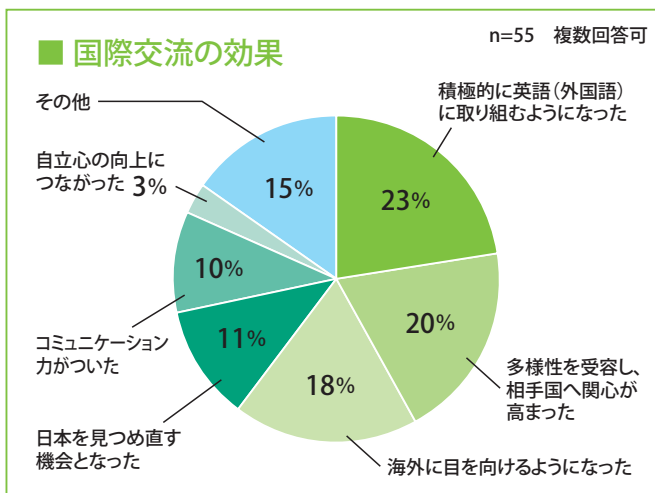
③交流実績を積み重ねることで、PDCAによる活動の改善が図れること。

④校内体制や実施のノウハウを共有・引き継ぐことで、安定した継続的な交流を実施することができること。

などの点から、極めて大きな意義がある。

3 国際交流の教育的効果

本手引きを取りまとめるに当たり、全国規模でアンケート調査を実施したところ、以下のような回答が得られた。



4 姉妹校提携等国際交流の現状、課題

学校間提携の方法には、相互交流である「姉妹校提携」から、ほんの数時間だけ相手校もしくは日本にて受入れを行う「セレモニー型交流」まで様々である。本来、姉妹校の定義は「相互型」であるが、実際は「送り出し型」のみの交流でも姉妹校提携に至っている場合もある。

高等学校での実施状況は、「送り出し型」に比べて「受入れ型」は

少数であるが、近年の訪日観光客の増加とともに「受入れ型」交流は増加傾向にある（P8～9、P61データより）。2020年の東京オリンピックに向けて日本そして東京は世界的に注目度も高く、交流機会増大のチャンスともいえる。

コラム 欧米校における姉妹校提携の考え方

学校間の国際交流には姉妹校 (Sister School) 提携以外にも友好校 (Friendship School) 提携という提携方法がある。欧米では「姉妹校交流＝相互交流」という認識が強く、既に複数の姉妹校があったり、受入れのみを望んでいる学校の場合、友好校 (Friendship School) 提携であれば締結できるとの回答がある場合がある。現時点では相互交流よりも送り出し優先である場合などは、姉妹校 (Sister School) 提携をリクエストしつつ交流開始時は日本側の送り出しが主であることを相手校に伝え、姉妹校提携を結ぶ方法もある。

5 姉妹校提携・交流開始に至るまでの流れ

(1) 提携意思を明確にする

提携意思を明確にし、どのような交流を望むのかを明確にする。姉妹校提携を進めるに際し、まずは自校がどのような交流を望むのか交流の形式・交流の内容などについて、学内外の関係者と協議した上で、方針を明確にする必要がある。この際、特定の教員個人を担当とせず、「国際交流委員会」などの窓口を定める方が望ましい。

交流の方法

- 送り出し型
- 受入れ型
- 相互型

交流の内容

- 文化交流
- スポーツ交流
- 科学・ものづくり交流
- 国際貢献
- 授業体験・大学視察

(2) 相手国や地域のイメージを決める

交流のイメージが決まったら、それを実現できる国や地域を探す。

検討のポイント

- 風土、気候などの類似性
- 歴史的共通性
- 産業の共通性
- 既存のネットワークを優先

(3) 情報提供の準備

姉妹校を探すには、相手に自校を知ってもらう必要があり、改めて自校の特徴をまとめて、英訳しておく必要がある。また、外国大使館や政府観光局など、姉妹校提携を仲介してくれる機関に相談する際には、希望する交流内容や手段について問われることがあるので準備が必要である。

～選ばれる立場にもあることを認識する～

姉妹校提携を申し入れるに際し、選ぶ側の立ち位置にあるのではなく、相手校には他国や日本の他校からも申入れがあり、自校が選ばれる立場にもあることを認識する。そのためにも、自校の目指す国際交流の在り方や強みを明確にする必要がある。

(4) 関係者との情報共有

姉妹校交流を継続した取組にするためにも、姉妹校選定は一部の教員が進めるのではなく、学内及びPTAなど地域の関係者とも広く情報を共有しながら進めることが望ましい。

PTAに海外の教育機関とのパイプがありコーディネートができる人がいたり、地域単位で既に国際交流を実施しているケースもある。

後に、ホームステイの協力を要請することになる場合もあり、提携の初期段階で情報を共有しておく。

(5) 受入れ体制の確認

姉妹校提携は「送り出し型」から発展する 경우가多いが、可能であれば保護者へのアンケート等などで自校の受入れ可能性を認識しておく。

(6) 提携先選定

①コーディネーターに相談

校内の合意、国や地域等のイメージがある程度決まったら以下に相談する方法がある。

ア) 東京都教育委員会

東京都では次の教育行政機関と教育に関する覚書を締結している。

- カナダ(ブリティッシュ・コロンビア州)
- オーストラリア(クイーンズランド州、ニュー・サウス・ウェールズ州)
- 台湾(台北市、高雄市)
- ニュージーランド

イ) 各国大使館・政府観光局

機関の方針により、コーディネートへの関わりは様々である。

オーストラリア(クイーンズランド州、ビクトリア州)、カナダ(ブリティッシュ・コロンビア州)などは両国間での姉妹校提携の推進に特に積極的であり、初期段階での様々な相談に応じてくれる。

ウ) 「留学フェア」への参加

各国の大使館が主催する「留学フェア」について、その主目的は留学を志す方への情報提供であるが、学校関係者が将来的な姉妹校・友好校を探す機会としても有効である。一般の留学希望者が参加する日の前日に教育関係者向けのプログラムが設定されることが多く、そこで姉妹校に関して具体的な相談ができる。

ここで提携先の紹介を受け、その後の双方で調整を行い姉妹校提携に発展する場合もある。

エ) 国際交流推進団体(参考P63)

特定の国・地域などで、国際交流を推進する窓口になっている団体もある。

オ) 留学・旅行会社に相談

留学専門会社や旅行会社に相談する方法もある。手続き面で協力を依頼できる部分もあり、教員の業務を軽減できるメリットもある。

②教員 保護者 PTA等の個人的つながりを利用

学校関係者の個人的なつながりから交流がスタートする場合もある。上記ア)～オ)のような紹介がなく、やみくもに海外の学校に提携

申入れのメールを送っても返信があることはまれである。海外の慣習では個人と個人のつながりを大切にする風習があり、上記の手段を個人とのつながりを作る第一手段として活用してみるのも一つの方法である。

(7) 調整事項の整理

①相手校との窓口担当者を決める

校内の国際交流委員会など、管轄窓口を設置し、担当を複数名配置する。

なお、電子メールアドレスは担当者共有のものとする。

②締結文書の作成

提携する交流内容の概念が相手校のイメージする内容と相違が生じないように、実現したい交流内容を文書化し、相手校と双方で確認することが重要である。

*参考:本手引き書のP16～P19に英文、中文、韓文の姉妹校締結文書例を掲載

③オンラインでの通信などが可能なIT機器を準備する

複数の担当者でやりとりをする場合は、オンラインでの通信などが便利であり、通信可能なIT機器、アカウントを準備するとよい。メールよりも直接話をしたほうが良いと思われる場合に使用する。

また、後に生徒同士の交流に用いる場合もある。

④地域、保護者へ周知し協力を要請する

学校が姉妹校提携を検討していることを地域の保護者にも周知し、進捗があれば共有する。姉妹校締結後に関係者から「姉妹校として他の選択肢が無かったのか」といった意見が出る場合があり配慮が必要である。

(8) 訪問

候補校が決まったら、提携の形式や交流の内容について候補校の担当者と調整する。その際、実際に現地に視察訪問を行うとよい。

(9) 調印

候補校を視察訪問するなどし、姉妹校提携締結文書の内容に双方の合意に至ったら調印式の準備を行う。校長又は副校長による調印が一般的である。

- 相手校を訪問し、現地で調印
- 相手校を訪問し仮調印し、日本で正式調印
- 相手国が来日し、日本で調印

(10) 交流開始

実施しやすい内容から始めるとお互いの負担が軽減され、やり取りがスムーズになる。

- 相手校との事前準備・調整(メール・オンラインテレビ電話等)
- 短期研修の実施
- 訪日研修の受入れ(ホームステイ先の手配)

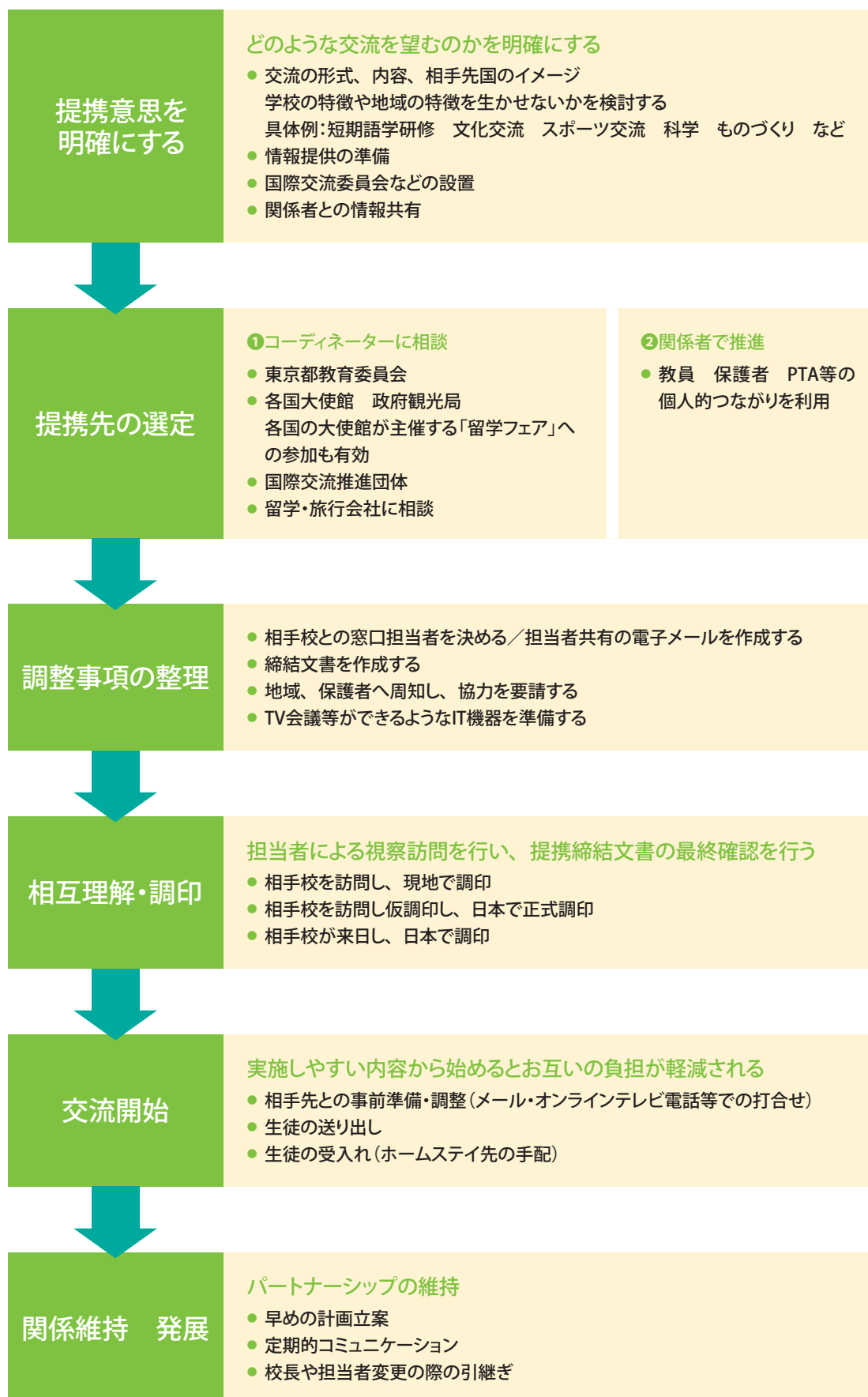
(11) パートナーシップの維持

労力をかけて姉妹校提携等を実現しても、担当者の異動や他の学校行事の関係で交流が停滞してしまう場合もある。そのような事態を回避するため、早めの計画立案と、定期的なコミュニケーションが必要である。

- 早めの計画立案
- 定期的コミュニケーション
- 校長や担当者変更の際の引継ぎ

姉妹校提携・交流開始に至るまでの流れ(例)

姉妹校提携締結及び国際交流を始めようとする際に、どのような手順を踏めばよいのか、提携校の探し方から交流開始に至るまでを例示する。



安全管理に対する準備

1 緊急連絡体制の構築

大規模災害や局地的テロ事件が多発している最近の情勢を踏まえ、緊急連絡体制の構築を行う必要がある。

- ① 夜間・休日における緊急連絡先(担当部署、電話番号、電子メールアドレス)の設置
- ② 渡航生徒名簿の作成
- ③ 緊急時における関係部署や当該生徒の家族への連絡手順の確認

2 事前オリエンテーションの実施

生徒に対してはオリエンテーション等の実施で危険回避及び緊急事態に対する心構えを指導する。

- ① 危機発生のあることへの認識
- ② 危機回避のための心構え(服装、持ち物等)
- ③ 危機発生時の対応についてのシミュレーション
- ④ 健康状態のチェック

3 保険への加入と確認すべき事項

- ① 適切な保険への加入
- ② 旅行会社、航空会社の危機発生時の補償内容と対応方法を確認

4 国際情勢、渡航先の安全性についての情報収集

- ① 国際情勢の変化や動向についての把握
- ② 現地の安全情報の把握
- ③ 感染症情報の把握と予防接種の必要性の有無
- ④ 渡航先の政治・文化、日本との関係や対日イメージなどの理解

～外務省安全ホームページ～

最近のテロ等の治安情勢を踏まえ、外務省海外安全ホームページでは日頃から危機管理意識を持ち、海外渡航時の日程や渡航先での連絡先を家族や職場等と共有するよう、注意喚起がなされている。

URL <http://www.anzen.mofa.go.jp/>

【注意】外務省海外安全ホームページメールサービスを使った注意メールにご注意ください

海外に渡航される方は、最近のテロ等の治安情勢を踏まえ、十分注意してください。

詳細については、渡航先の国・地域の最新の海外安全情報を参照してください。

(広域情報「バンダラデシ」における銃撃・人質被害を受けた海外に渡航・滞在される方の安全対策のためのお知らせ)

5 「たびレジ」への登録(3か月未満の海外での滞在)

生徒が海外に渡航を予定している場合は、緊急時に備え、必ず外務省の「たびレジ」(滞在が3ヶ月以上の場合は在留届)へ登録する。

「たびレジ」は、海外旅行する邦人が、旅行日程・滞在先・連絡先などを登録すると、滞在先の最新の海外安全情報や緊急事態発生時の連絡メール、また、いざという時の緊急連絡などが受け取れるシステムである。

～「たびレジ」への登録～

URL <https://www.ezairyu.mofa.go.jp/tabireg/>

- ① 渡航先情報の提供
「たびレジ」に旅行日程を登録すると、旅行先在外公館の連絡先や、旅行先国の海外安全情報などを確認することができる。
- ② 緊急時の情報提供
登録した全てのメールアドレスに在外公館が出す緊急一斉通報や、最新海外安全情報メールが送付される。
例) 現地政府より外出禁止令が発令された。
津波注意報が発令された。
- ③ 緊急時の連絡
旅行先の国・地域で緊急事態が発生した時には、登録した電話番号や、宿泊先に、緊急時の連絡を行う。

6 在留届の提出(3か月以上の海外での滞在)

外国に住所又は居所を定めて3か月以上滞在する人は、旅券法第16条により、その地域を管轄する日本大使館又は総領事館に速やかに在留届を提出することが義務付けられている。

海外に在留邦人が事件や事故、災害に遭ったのではないかとと思われるとき「在留届」があれば安否の確認、緊急連絡、救援活動、留守宅への連絡等が迅速に行われる。

「海外で事故にあったのでは」といった留守宅からの安否問合せに対しても「在留届」があると早く確認できるため、安全管理上必ず登録する必要があります。

在留届 <https://www.ezairyu.mofa.go.jp/RRnet/>

国際交流の現状を知る

実際の国際交流の状況は文部科学省が行っている「高等学校等における国際交流の実態について」（昭和61年度から隔年で実施）で概略を確認できる。ここでは、姉妹校提携など幾つかの項目を抜粋する。

国際交流の現状(姉妹校提携)

姉妹校提携について

外国の学校と姉妹校提携を結んでいる高等学校等は1,043校(公立542校、私立492校、国立9校)である。

姉妹校提携を結んでいる学校は延べ2,102校(平成24年5月1日

1,909校)で前回調査より約10%増加した。

提携先は42か国・地域にわたり、国・地域別ではオーストラリアが最も多く473校、次いでアメリカ372校、韓国274校、中国216校の順となっている。

姉妹校提携先国ランキング(高等学校)

順位	提携先国・地域	学校数			計	提携内容						協定等が有
		公立	私立	国立		文通・作品交換等	姉妹校訪問	児童・生徒受入れ	留学	教員交流	その他	
1	オーストラリア	165	308	0	473	52	358	280	143	86	48	302
2	アメリカ	148	224	0	372	64	272	170	105	80	62	238
3	韓国	109	164	1	274	42	213	111	29	66	53	190
4	中国	64	150	2	216	25	138	104	58	81	85	174
5	ニュージーランド	47	164	2	213	16	140	115	113	32	18	161
6	台湾	53	63	2	118	19	96	49	17	29	18	88
7	カナダ	26	66	0	92	12	52	43	47	18	8	73
8	イギリス	19	58	0	77	7	48	29	34	15	11	50
9	タイ	10	30	2	42	5	32	32	9	13	3	36
10	ドイツ	19	18	0	37	6	28	27	6	5	1	24

国際交流の現状(送り出し)

生徒の留学(3か月以上)について

外国の高等学校等へ生徒を派遣した高等学校数は、延べ1,879校(公立871校、私立979校、国立29校)である。

先行は46か国・地域にわたり、アメリカが最も多く1,156人、次いで

ニュージーランド847人、カナダ642人、オーストラリア454人の順となっている。

留學生徒数は、延べ3,897人(平成23年度3,257人)で、前回調査より約20%増加した。

送り出し3か月以上の交流先国ランキング(高等学校)

公・私・国立(総括表)

順位	提携先国・地域	学校数	留學生徒数					主催者			
			1年	2年	3年	4年	計	学校	都道府県等	幹団体等	個人
1	アメリカ	580	343	594	219	0	1,156	173	97	714	172
2	ニュージーランド	213	319	514	14	0	847	618	47	137	45
3	カナダ	245	214	378	50	0	642	262	6	298	75
4	オーストラリア	202	190	244	20	0	454	173	52	188	42
5	イギリス	53	32	110	27	1	170	123	0	23	24
6	ドイツ	100	31	63	15	0	109	5	5	80	19
7	フランス	59	19	28	17	0	64	0	1	60	3
8	イタリア	35	13	14	9	0	36	0	3	29	4
9	中国	22	10	12	7	0	29	4	9	7	9
10	メキシコ	24	12	10	3	0	25	0	0	21	4

生徒の外国への研修旅行(3か月未満)について

外国への研修旅行(語学等の研修や国際交流等が目的)に生徒を派遣した高等学校数は延べ3,197校(公立1,937校、私立1,219校、国立41校)である。

行先は、44か国・地域にわたり、アメリカが最も多く10,100人、次いでオーストラリア9,819人、イギリス4,568人、カナダ3,914人の順となっている。

研修旅行参加生徒数は、延べ38,152人(平成23年度29,953人)で、前回調査より約27%増加した。

送り出し3か月未満の交流先国ランキング(高等学校)

公・私・国立(総括表)

順位	提携先国・地域	学校数	研修旅行生徒数					主催者			
			1年	2年	3年	4年	計	学校	都道府県等	斡旋団体等	個人
1	アメリカ	769	4,263	5,362	474	1	10,100	8,453	678	863	106
2	オーストラリア	646	4,376	4,890	533	0	9,819	9,057	153	518	91
3	イギリス	308	2,801	1,506	261	0	4,568	4,007	56	436	69
4	カナダ	264	2,293	1,314	307	0	3,914	3,524	117	215	58
5	ニュージーランド	206	1,744	1,109	156	0	3,009	2,686	70	230	23
6	韓国	240	483	633	195	0	1,311	868	328	108	7
7	台湾	92	206	473	100	0	779	679	57	40	3
8	シンガポール	73	210	456	39	0	705	641	46	9	9
9	オーストリア	37	199	347	17	0	563	494	2	9	58
10	中国	74	163	257	37	0	457	202	168	84	3

外国への修学旅行について

外国への修学旅行を実施した高等学校等は延べ1,300校(公立437校、私立852校、国立11校)である。

行先は31か国・地域にわたり、参加生徒数から見るとアメリカが最

も多く、260校35,168人、次いでシンガポール167校23,571人、台湾140校20,829人、マレーシア132校20,614人の順となっている。

参加者数は、延べ168,668人(平成23年度151,419人)で、前回調査より約11%増加した。

海外修学旅行渡航先ランキング(高等学校)

順位	行き先国・地域	公立			私立			国立			計	
		県・市数	学校数	参加者数	県数	学校数	参加者数	大学	学校数	参加者数	学校数	参加者数
1	アメリカ	31	90	13,017	39	169	22,027	1	1	124	260	35,168
2	シンガポール	32	65	9,225	34	101	14,099	1	1	247	167	23,571
3	台湾	33	78	13,725	33	59	6,820	3	3	284	140	20,829
4	マレーシア	27	72	11,396	26	59	9,055	1	1	163	132	20,614
5	オーストラリア	18	25	2,587	31	123	17,093	1	1	95	149	19,755
6	韓国	26	52	5,515	32	59	6,382	1	1	140	112	12,037
7	カナダ	7	8	701	23	48	6,794	1	1	119	57	7,614
8	イギリス	2	4	205	23	53	7,155	1	1	143	58	7,503
9	フランス	4	6	592	21	47	6,234	0	0	0	53	6,826
10	ニュージーランド	1	2	384	14	27	2,414	0	0	0	29	2,798

(出典：文部科学省初等中等教育局国際教育課「平成25年度高等学校等における国際交流等の状況について」より参照・抜粋)

姉妹校提携の活動事例



「送り出し型」交流から ホームステイを受け入れ、「相互型」に発展

🇯🇵 豊田北高等学校(愛知県/公立)

🇺🇸 Presentation College Windsor (PCW) / Christian Brothers College (CBC) /
St Mary Primary School (小学校) (オーストラリア/ビクトリア州)

参加人数 約30名

概算費用 30万円

交流開始のきっかけ・経緯

愛知県教育委員会より「あいちスーパーイングリッシュハブスクール」の拠点校に指定され、その一環として取り組んでいる。当初は相互交流の型で提携校を探していたが、人数等の関係で「送り出し型」で実施した。一昨年度末に企画が持ち上がり、昨年度5月に現地踏査・交流校との打合せを経て8月に第1回目、今年度の8月に第2回目を実施した。今後PCWの日本語を選択している生徒が修学旅行で日本を訪れ、生徒の家庭にホームステイを行い、相互型に発展する予定である。

主な内容

- 1 PCW (女子校)では、毎年語学研修及び体育・調理・美術の授業・ホームステイ先の生徒の授業に参加している。その他に、昨年度は全校集会で学校を紹介するプレゼン・校歌披露などを実施、今年度はアスレチックデーに参加し交流を行った。
- 2 CBC (男子校)では男子生徒が、日本語クラスの授業に参加。生徒は英語を、CBCの生徒は日本語を学んだ。
- 3 PCW、CBC、St Mary小学校の各学校で日本文化を紹介する時間を設定。生徒が「盆踊り」「日本の昔のおもちゃ」「お弁当」「お祭り」などを紹介し、交流を行っている。
- 4 全ての生徒がPCW又はCBCの生徒の家庭にホームステイしている。
- 5 提携校だけでなく、小学校も訪問し日本文化を紹介している。参加する生徒の多くは子ども好きで小学生との交流を楽しんでいる。

効果

- 海外への興味・関心が深まった生徒が多い。
- 英語の発音・抑揚などを意識して授業に取り組む生徒が多くなった。
- 海外の友人を作りたい、また海外へ行ってみたいと思うようになった生徒が多い。
- 交流校の生徒に触発され、自分の意見・考えを持たなければいけない、主張できるようにならなければいけないと感じる生徒が多くなった。
- 英語を話せたり、聞いたり、理解できれば世界が広がることに気づき、英語学習の重要性を認識する生徒が増えた。
- 帰国後も、近隣の小学校での出前授業に参加する生徒もいる。

効果測定

- 参加者及び保護者へのアンケートを実施している。
- 帰国後に報告書を作成し、その内容から生徒の変容をはかっている。

今後に向けて

- ホストファミリーによって、経済状況などの諸条件が様々で、家庭での過ごし方が異なる。
- 帰国後、授業の中で英会話への意識やモチベーションを維持できない生徒がいる。
- 季節が反対であり、帰国後すぐに新学期が始まる日程だと身体的な負担が大きい(本当は8月上旬に行きたいが、別の日本の高校が訪問しており日程変更が困難)。
- 学期の始まる時期が異なり、ホストファミリー探しに困難が伴う。





美術の授業を体験



PCWにて休憩時間



クイーンズランド州教育省から 推薦された相手校と姉妹校提携

 柏南高等学校(千葉県/公立)
 Bundaberg State High School
 (オーストラリア/クイーンズランド州)

参加人数 23名

概算費用 30.9万円

交流開始のきっかけ・経緯

校長が積極的な異文化交流を希望したこともあり、国際交流準備委員会を立ち上げて派遣先や派遣時期などを検討し始めた。留学の受入れに積極的な自治体主催の説明会などにも参加しながら、様々な国・プランを検討したが、一番好条件がそろったのがオーストラリアであった。オーストラリア・クイーンズランド州政府 駐日事務所へ相談をしたところ、Bundaberg State High Schoolの紹介を受けた。

主な内容

日本の夏休み期間(14日間)を利用し、クイーンズランド州バンダーバーグで海外研修。相手校の生徒宅にホームステイし、授業にも参加した。オーストラリア固有の自然・生物や自然保護について学ぶための遠足も実施。特別授業やウェルカムパーティ、さよならパーティ、修了証書授与式なども設定してくれた。

今後に向けて

現在はまだ一般的な交流内容にとどめているが、今後は大学の見学やプレゼンテーション・ディベートの授業を組み込むなど、よりアカデミックな内容を増やしたい。

実施スケジュール例

1日目	成田空港発
2日目	ブリスベン空港着 歓迎パーティ、英会話レッスン
3日目	午前:英会話レッスン 午後:現地の授業に参加
4日目～ 5日目	ホストファミリーと過ごす
6日目	午前:英会話レッスン 午後:現地の授業に参加
7日目	環境教育研修
8日目～ 10日目	午前:英会話レッスン 午後:現地の授業に参加
11日目	遠足
12日目	お別れパーティ
13日目	ゴールドコースト観光
14日目	ブリスベン空港発 成田空港着



歓迎の場面



遠足でウミガメビーチへ



Human Power Vehicle の授業



ビデオ会議、送り出し、受入れの 幅広い交流形式で全校的な国際化を図る

🇯🇵 長生高等学校(千葉県/公立)
🇦🇺 Nossal High School (オーストラリア/ビクトリア州)

参加人数 送り出し:15名程度
受入れ:15名程度

概算費用 送り出し:25万円(生徒一人当たり)

交流開始のきっかけ・経緯

Nossal High Schoolが日本で交流校を探しており、ビクトリア州教育省からの紹介を受けた。双方の学校担当者が直接連絡を取り合い、2014年から交流を開始。2016年には正式に姉妹校提携を結んだ。

主な内容

送り出し: 高校2年生から希望者を募り、8月又は9月に渡豪。研修中はNossal High Schoolの生徒宅にホームステイをした。学校では、歓迎セレモニーや日本語授業への参加などを行い、音楽会ではソーラン節を披露し日本文化を紹介した。また、自然観察活動の一環としてフィリッパ島でのペンギンパレードを見学、その他ブルーマウンテンやシドニーへの観光等もプログラムに取り入れた。

受入れ: Nossal High Schoolで日本語を選択している生徒が1週間程度来校。数学や英語など一般授業に参加するほか、書道、茶道、琴、空手など日本文化を体験できる機会を提供している。

オンライン: 英語の授業(長生高校)と日本語の授業(Nossal High School)で時間を合わせ、ビデオ会議の機会を設けている。日本からは英語で、Nossal High Schoolからは日本語で質問やプレゼンテーションを行い、海外研修参加者だけでなく、その他の生徒にとって国際交流を行う機会になっている。

効果

- 海外研修やビデオ会議の実施により、学んだ英語を実践する機会が増え、英語学習への意欲が上がった。
- 国際ロータリーによる海外派遣への参加などに興味を持つ生徒が増えた。

効果測定

帰国後にアンケートを実施

今後に向けて

受入れ時のホームステイ先の確保



ビデオ会議の様子



Nossal High School との交流の様子



フィリッパ島のペンギンパレード



語学研修とUniversity of Victoriaの寮生活を体験できる姉妹校との交流

🇯🇵 世田谷学園中学校・高等学校(東京都／私立)

🇨🇦 Glenlyon Norfolk School
(カナダ／ブリティッシュ・コロンビア州)

参加人数 語学研修に関しては高校1年生全員

概算費用 40万円

交流開始のきっかけ・経緯

1983年、国際理解教育の場として現地事情を視察し、英語教育の視点も含めてカナダが最適であると結論に達した。1985年9月に中学3年生生徒71名が7名の教員に引率されて初の海外修学旅行に出発。Glenlyon Norfolk Schoolの生徒宅にホームステイをして現在に至っている。

教員による現地視察を経て、Glenlyon Norfolk Schoolと姉妹校提携

主な内容

- 1 高校1年生全員が参加するカナダ英語研修では、12日間の語学研修とUniversity of Victoriaの寮生活やホームステイを体験
- 2 両校で選抜された生徒若干名が、交換留学生としてお互いの学校で学ぶ。

効果

カナダの生活や文化などについて英語で学ぶことで異文化理解が深まるとともに、生徒のリスニング能力・スピーキング能力が向上

効果測定

参加者へのアンケートを実施

実施スケジュール例

1日目	羽田空港からバンクーバーへ移動
2日目	ビクトリアへ移動・語学研修
3日目～5日目	Glenlyon Norfolk Schoolにて語学研修 University of Victoriaの寮滞在
6日目～10日目	Glenlyon Norfolk School ホームステイ滞在
11日目	ビクトリアからバンクーバー空港へ バンクーバー空港発羽田空港へ
12日目	羽田空港着



研修中の一コマ



研修先の様子



移動の様子



研修中の一コマ



学期編入（約9週間）を目的に、姉妹校締結。 教員の現地視察を経て調印

🇯🇵 麴町学園女子中学校・高等学校（東京都／私立）
🇳🇿 Wellington East Girls' College
（ニュージーランド／ウェリントン）

参加人数 希望者8名（28年度）

概算費用 約50万円

交流開始のきっかけ・経緯

ニュージーランドの女子校を希望していたところ、現地からの紹介があった。その後、教員による視察を経て姉妹校締結。短期語学研修を毎年実施する中で、自治体からの補助を得て長期送り出し(61日間)を開始

主な内容

- 1 現地学校での英語レッスンと、学校への授業参加
- 2 事前学習に実践的なサバイバルイングリッシュを加えたことで、生徒が安心して主体的に取り組むようになった。

効果

海外経験により、英語学習への意欲が高まった。

効果測定

アンケートを実施

実施スケジュール例（夏出発）

1日目	成田空港からオークランド空港へ移動
2日目	オークランド空港からウェリントン空港へ移動 キャンパスツアー＆周辺散策 ホストファミリーと面会
3日目	ホストファミリーと休日過ごす
4～ 64日目	現地校の3学期へ編入（約9週間）
65日目	ウェリントン空港からオークランド空港へ移動
66日目	オークランド空港から帰国



代替先として打診があり、2年後姉妹校提携へ

🇯🇵 能代松陽高等学校（秋田県／公立）
🇺🇸 Oak Park and River Forest High School (OPRF)（アメリカ／イリノイ州）

参加人数 送り出し：20名
受入れ：26名

期間 15日間

交流開始のきっかけ・経緯

OPRFが県外他校と実施していた交流が打切りとなり、代替先として打診があった。交流を開始し、送り出しの2年目に校長が同行し、現地で姉妹校提携を結んだ。

主な内容

送り出しは毎年行っているが、受入れは2年ごとに行っている。送り出しの際には、現地の授業に参加するほか、近隣の小中学校を訪問して日本文化についてのプレゼンテーションを行ったり、文化施設を訪問して異文化に触れる機会を設けたりしている。また、現地校で行われる「日本祭り」の各ブースを担当し、一般来場者に対して日本の文化を教えるなどの交流も行っている。

効果

帰国後、生徒の英語学習への意欲が高まったように見える。

また、外国人と交流をすることに対する壁が低くなっているように思われる。

効果測定

参加者へアンケートを実施するほか、英語検定などの合格、定期考査の成績推移を調査している。

必要な調整

双方の都合の良い時期が合わず、調整が難しい。また、学校を欠席して参加しているが、その間の授業の遅れが発生する。年度末に近い時期で実施していることもあり、年度内の事後指導の調整が必要



お互いの国について意見交換



送り出し型交流から姉妹校締結へ発展

共立女子第二中学校・高等学校(東京都/私立)
 Waihi College (ニュージーランド/ワイヒ)

参加人数 送り出し：約20名
 受入れ：約6名
 概算費用 約43.5万円

交流開始のきっかけ・経緯

短期の交流(送り出し型)を重ね、2014年に調印式を行い姉妹校締結。相互型へ

主な内容

送り出し: 夏休み期間中の2週間、約20人を派遣。英語研修だけでなく、現地の学生に日本語を教えたり、日本文化の紹介などを行う。体験授業(縫製、酪農等)、ロトルア等の観光地への小旅行や現地の少数民族について学ぶ機会も設けている。

受入れ: ワイヒカレッジから数名の学生が来日。英語で日本の文化について話し合い、世界史の授業ではそれぞれの国についてプレゼンテーションを行った。他に体育の授業(バレーボール)、調理実習でBeef Bowl(牛丼)作り(醤油味の肉は珍しいため)、茶道部員と茶道体験等

効果

- 一方的な送り出しから相互交流になったことで、ホームステイや留学が一般の生徒にとっても身近になりつつある。
- 日本から離れることで改めて自分の国を見つめ直し、よりグローバルな視点で物事を見られるようになった。

今後に向けて

- モチベーションが向上した生徒への更にハイレベルな受け皿の提示
- 長期留学制度やターム留学の更なる充実

コラム 編入学協定

クイーンズランド工科大学との編入学に関する協定を締結

明石工業高等専門学校(兵庫県/国立)
 Queensland University of Technology(QUT)
 (オーストラリア/クイーンズランド州)

交流開始のきっかけ・経緯

オーストラリア留学フェアでの面会を通じて交渉を開始、その後はメールでのコンタクトを続けた。お互いの機関への訪問・視察も行った。

なお、交渉開始から協定締結まで、オーストラリア大使館およびクイーンズランド州政府駐日事務所から随時的確なアドバイスを頂いた。

交渉開始(相手機関訪問含む)→英語版シラバス作成→QUT側で同シラバスを精査→合意

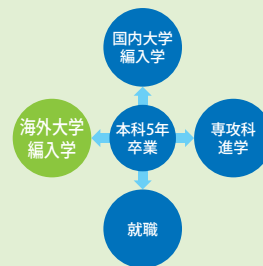
主な内容

これまで高専の学生が海外の学士課程へ進学する場合、本科5年を卒業後、同課程の1年次から入学する必要があったが、本協定(編入学制度)により直接3年次へ編入することが可能となった。また、本編入学制度により取得する学位は、

概して成績優秀者や別途1年間の専門研究を修了した者に与えられる「優等学位(Bachelor Honours)」となり、高専教育のレベルの高さが認められた。

効果

学生の進路に新しい選択肢が加わり、十分な知識と技能を修得した学生が海外の大学に直接編入学し、早期から世界レベルの研究に携わることが可能となった。また、海外の一流大学に高専の教育システム・レベルが認知されたことで、他高専においても同様の編入学制度を確立できる可能性が広がった。



選択肢の一つとして

姉妹校提携締結の際の契約書見本

英語 Ver.

①

AFFILIATION CHARTER

②

This affiliation charter has been prepared to mark the Association between XXX, Australia, and XXX, Japan.

③

- ∞ We will undertake and respond to the educational, cultural, and social needs of the staff and students of both institutions in a spirit of cooperation, friendship and enterprise by using the affiliation to foster peace and tolerance between the students and staff of both institutions and nations.
- ∞ All students will be assured of a framework of care, support, counseling, and teaching at the highest professional levels.
- ∞ Exchanges of students within the affiliation can be short term or longer.
- ∞ In the case of the short term exchanges, they will be collaboratively developed and will be approved solely by the administrations of both institutions. Students applying for longer term exchanges must meet the entry requirements for international students established by the host institution.
- ∞ Both institutions agree to develop a continuing communication program involving staff and students through correspondence and visits for the mutual benefit of the two institutions in order to promote a greater understanding of the cultures, social customs and societies of both countries.

④

In addition, both institutions understand that:

1. Any associated financial agreements will be negotiated separately and will depend on the availability of funds at each institution. Moreover, nothing in this agreement shall be construed as creating any legal or financial obligations between the parties.
2. Any aspect of this agreement may be amended or revised after further consultation and mutual agreement.
3. This Affiliation Agreement is to be established on the day of signing this document and to be effective for three years. Unless both schools refer to the cancellation of the affiliation, the contract is to be extended each year during the following three years. If either one of the schools proposes a termination of the agreement by 90 days prior to the last day of either school's school year, the affiliation is to be discontinued on the last day of either school's school year.

⑤

Dated on this day March 1, 2017

⑥

Signed _____

Signed _____

⑦

⑧

⑨

① 姉妹校名

④ 提携に関する附則

⑦ 自校代表者署名

② 自校名

⑤ 姉妹校提携締結日

⑧ 姉妹校名

③ 姉妹校提携の目的と詳細

⑥ 姉妹校代表者署名

⑨ 自校名

日本語 Ver.

姉妹校提携書

②

この提携書は、日本の●●●●と、オーストラリアの●●●●との姉妹校提携に当たり作成されたものである。

①

この提携書を交わした両校は、それぞれの生徒や教職員間、そして両国間の平和や寛容性を育むために提携を活用することにより、協調、友好、覇気の中に則り、両校の教職員や生徒の教育的、文化的、社会的な必要性に応えるべく努力していくこととする。

全生徒は最高の専門的水準での保護、支援、相談、教育の原則を保障されるものとする。

この提携による生徒の交流は短期間の場合もより長期の場合もある。

短期間の交流については両校の協力で企画し、各々の管理職の了解を得るものとする。長期間の交流を申し込む生徒は、受入れ校における留学生の入学条件に適合していなければならない。

③

両校は両国の文化、社会的習慣、社会のより良い理解を促すため、双方にとって利益となる継続的なコミュニケーションプログラムを企画することに同意する。このプログラムは両校の生徒と教職員が関与し、文通や訪問によって実施されるものとする。

附則

- 1 本提携に付随する費用に関わる契約を別途交渉によって締結するものとし、両校の資金状況によってその内容が決定される。また、本合意書は、双方にいかなる法的義務も金銭的義務も生じさせない。
- 2 本提携書のいかなる点も、更なる協議や相互の合意があれば、修正又は訂正できるものとする。
- 3 本提携書は署名の日をもって成立し、3年間効力を持つものとする。その後の3年間は、双方より提携の終了の申出がなければ、本提携書は1年ずつ延長されるものとする、いずれかの学校から提携の終了の申出が、いずれかの学校の年度最終日の90日前までにあれば、その年度の最終日をもって提携を打ち切るものとする。

④

この提携書は英語と日本語の両言語で作成する。いずれの言語で作成されたものも同じ効力を持つ。

ここに両校は平和、友好、親善の精神に則り、合意の印として署名する。

2017年3月1日

⑤

⑦

署名 _____

署名 _____

⑥

⑨

⑧

① 姉妹校名

④ 提携に関する附則

⑦ 自校代表者署名

② 自校名

⑤ 姉妹校提携締結日

⑧ 姉妹校名

③ 姉妹校提携の目的と詳細

⑥ 姉妹校代表者署名

⑨ 自校名

姉妹校提携締結の際の契約書見本

中国語 Ver.

② 中华人民共和国●●●●●

① 日本国●●●●●

关于建立友好学校关系的协定书

③ ② 中华人民共和国●●●●●与日本●●●●●，本着《●●省与●●县关于友好协定的协定书》的精神，为两省、县的发展和教育的振兴，经双方商定，同意建立友好关系学校。①

为进一步推进交流合作，双方同意开展以下交流活动：

- 1 双方开展人员互访、考察活动，以增进双方了解，加深友谊，促进合作。
- 2 双方举办书法、美术、摄影作品联展，开展音乐、体育交流活动，共同促进双方艺术、体育教学水平的提高。
- 3 建立双方定期通报办学情况机制，及时交流办学经验，以利互补，共同发展。

在此基础上，根据需要两校可对交流内容，合作事项进行协商，适时调整、适当增补。
此协定书从两校的代表者在中文和日文上签字之日起生效。

④ 中华人民共和国●●●●● ⑤ 日本国●●●●●

⑥ 校长 ⑦ 校长

⑧ 2017年 3月 1日

日本語 Ver.

① 日本国●●●●●と中華人民共和国●●●●●との

友好校提携に関する協定書

③ 日本国●●●●●と中華人民共和国●●●●●は●●県と●●省との友好協定に関する協定書の精神に基づき、両県省の友情を増進し、両県省の発展と教育の振興のために、双方の協議を通じ、友好校関係を樹立することに同意した。②

① 双方は友好交流を深めるために、以下の交流活動を展開する。

- 1 双方は相互に訪問や考察活動を行い、双方の理解と友情を深め、協力を促進する。
- 2 双方は相互に書道・美術・撮影等の作品連合展示会を開催し、音楽・体育交流活動を展開し、双方の芸術・体育教育のレベルの向上を促進する。
- 3 双方は定期的な学校運営活動の情報交換の体制を構築し、適時に学校運営の経験を交流し、教育の相互補完と共同发展に寄与する。

なお、必要に応じて双方は交流内容や協力事項についてを協議すること、また適時、適切に調整や補足することができる。
この協定書は両校の代表者が日本語版と中国語版に調印した日から効力を生ずる。

④ 中華人民共和国●●●●● ⑤ 日本国●●●●●

⑥ 学長 ⑦ 学長

⑧ 2017年 3月 1日

① 自校名

④ 姉妹校名

⑦ 自校代表者署名

② 姉妹校名

⑤ 自校名

⑧ 姉妹校提携締結日

③ 姉妹校提携の目的と詳細

⑥ 姉妹校代表者署名

※署名する位置・順序については相手国・相手校との協議・調整になります。

韓国語 Ver.

자매결연 제휴 협정서

②와 ①의 학생과 교사 전원은 지금까지 지속적으로 추진해 온 양국의 우호 관계를 바탕으로 양교의 발전을 바라며 교류활동에 의해 더욱 깊은 우호 관계를 위하여 다음 사항에 협의하고 자매결연 제휴 협정을 체결합니다.

- 1 양교의 학생과 교직원은 양국 문화와 역사의 상호이해가 깊어지도록 노력합니다.
- 2 학생들이 장래의 좋은 동반자로 성장 할 수 있도록 학생의 교류활동을 추진합니다.
- 3 학생과 교직원의 교류활동을 통해서 양교의 교육적 효과를 높이도록 노력합니다.
- 4 본 협정서는 한국어와 일본어로 2부씩 작성하며 모든 정문으로서 인정합니다.
- 5 본 협정서의 유효기간은 5년으로 합니다. 단 양교의 협의에 의해 기간을 연장할 수 있습니다.
- 6 본 협정에 관련된 교류 활동에 필요한 비용에 대해서는 참가자 각자가 부담 하는 것으로 합니다.

2017년 3월 1일

⑥ ③

⑧ ④

⑦ ⑤

日本語 Ver.

姉妹校提携協定

①と②の両校の生徒及び教職員一同は、これまで持続的に推進してきた両国の友好関係を基に、両校の発展を願い、また、交流活動により友情が更に深まることを願って、次の事項について合意し、姉妹校提携の協定を締結します。

- 1 両校の生徒及び教職員は、両国の文化と歴史の相互理解を深めるよう努力します。
- 2 生徒達が将来の良きパートナーとして成長することができるように、生徒の交流活動を推進します。
- 3 生徒及び教職員の交流活動を通じ、両校の教育力を高めるよう努力します。
- 4 本協定書は日本語と韓国語で二部作成し、双方とも同等の正文として認めることとします。
- 5 本協定書の有効期間は5年とします。ただし、両校の協議により期間を延長することができます。
- 6 本協定に係る交流活動に要する費用については、参加者各自が負担することとします。

2017年3月1日

⑤ ③

⑦ ④

⑧ ⑤

⑥ ⑥

① 自校名

④ 姉妹校提携締結日

⑦ 自校代表者署名

② 姉妹校名

⑤ 自校名

⑧ 姉妹校代表者署名

③ 姉妹校提携の目的と詳細

⑥ 姉妹校名

II 交流先の国の状況

国別基本情報 教育制度／交流に関する方針・要望

01

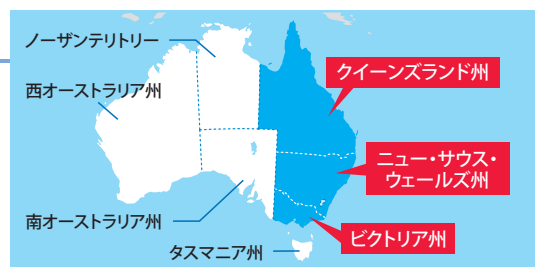
Australia

オーストラリア



交流上の特徴

- 日本語学習者数35万7千人(※)は世界4位、英語圏では1位
- 時差が最大2時間と少なく、授業時間内でのテレビ電話等による交流も可能
- 交流開始の際の相談窓口やフェア開催など政府機関によるバックアップ体制が整備
- 日本の夏期休業期間に授業があるため、夏の短期交流にも対応可能
(※「JAPAN FOUNDATION」2015年調査)



基本情報

オーストラリアは、第一外国語に日本語を学んでいる生徒も多く、オーストラリア側の学校も日本の学校との提携には学習上のメリットを感じている。また、時差が最大2時間と少なく、設備が整えば通常の授業時間内での交流が可能である。

学校間交流の開始時においても、大使館・領事館が主催する学校関係者を招待してのイベントがあり、各州政府の交流先をマッチングする体制も整備されている。

教育制度

学年制度

オーストラリアの初等・中等教育は(小学～高校)は12年制であり、1年生から6年生(又は7年生)までが初等教育(小学校)、中高一貫方式の中等教育(中学～高校)は7年生(又は8年生)から12年生までとなる。

学期編成

オーストラリアの学期は1月末(又は2月初旬)からスタートする4学期制(各10週間)で、各学期間に2～3週間の長期休業がある。特に夏休みは12月から1月末にあり、日本の夏期休業期間にも通常の授業が行われていることから、多くの短期交流活動が実施されている。

オーストラリアの学年制度

学校 Year 年齢	Primary School						Junior Secondary School						Senior Secondary School	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	11	12
	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		

オーストラリアの学期編成

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
休み	ターム2 4月中旬-6月下旬		休み	ターム3 7月中旬-9月中旬		休み	ターム4 10月上旬-12月上旬		夏期休業 期間	ターム1 1月下旬-3月下旬		休み

※ターム期間・休業期間は年によっても変動があり、州や学校によっても異なります。

交流開始の窓口

オーストラリアの教育政策は、連邦政府の統括の下、各州の行政部が管轄しているため、初等・中等(小・中・高)、専門学校の教育制度は州により異なり、交流先を検討する際の窓口も各州政府となる。州政府が管轄する州立校は概ね共学で全体の7割を占め、3割の私

学校では男女別学も存在する。州立校との交流に関しては、各州の教育省が窓口となり、提携先候補が提示され、その後は双方の学校間での協議となる。私学の場合はそうした仲介は入らず希望校との直接のやりとりに委ねられるのが一般的である。

交流に関する方針・要望

- 交流活動でやりたいことを明確にしてほしい(例えばサイエンスにフォーカスした交流等)。
- 短期交流は1週間でも可能だが、1ターム(3か月)以上の交流の方が双方にとって有意義な交流に発展する。
- 時差が少ないことから、Skype™等で授業をつなぐ交流が比較的実施しやすい。

Australia



ニュー・サウス・ウェールズ州

ニュー・サウス・ウェールズ州と教育

オーストラリアの南東部に位置するニュー・サウス・ウェールズ州。オーストラリア最大の都市シドニーは、経済、文化、教育の中心として、世界トップクラスの大学や研究機関が集まり、海外からの学生の受け入れにも積極的。州政府は2014年に「Study NSW」部を立ち上げ、10年計画でシドニーおよびニュー・サウス・ウェールズ州を訪れる外国人学生のために教育体験の充実を図る。安全性、教育水準が高いため、教育旅行に最適で、世界遺産やダイナミックな自然、多国籍文化、スポーツなどを組み合わせた多彩なプログラムが人気

ニュー・サウス・ウェールズ州教育省は東京都教育委員会と教育覚書を締結している。



国際交流

ニュー・サウス・ウェールズ州とは39の自治体が姉妹都市提携を結んでいる。主な教育機関は州政府となり、小中高校の3分の2は公立校。州政府は海外の中高校生グループ（10人以上）向けに同州の公立校生徒と交流するスタディツアーを提供する。授業や部活動への参加、学校が提供する様々なプログラムを通じて交流を深めることができる。ニ

ズに合わせて観光、英語学習や環境学習、舞台芸術、スポーツなどを盛り込むことも可能。現在、25校以上の公立校が教育旅行を受け入れている。同政府は1学期（3か月）から1年までの短期留学も中高生対象に手配する。オーストラリア人家庭でホームステイをしながら学校に通うプログラムで、生活習慣体験や活きた英語を学ぶことができる。

スタディツアー・プログラム

ニュー・サウス・ウェールズ州教育省のホームページからスタディツアー・プログラム、短期留学の問合せや申込みができる。ただし、英

語でのやり取りになるため、旅行代理店を通じて申し込むのが一般的である。

姉妹校提携までの流れ

CLAIR Sydney（クレア・シドニー：一般財団法人 自治体国際化協会シドニー事務所）が国際交流を希望する日本、オーストラリア、ニュージーランドの学校をホームページ上に掲載している。ニュー・サウス・ウェールズ（NSW）州の学校との交流を希望する場合、掲載の

学校名をクリックするとその学校の概要や担当者の氏名・連絡先が表示される。また、学校自らの情報を掲載して、海外からの交流希望校を募ることも可能。条件が合う学校、興味のある学校がある場合は、直接、担当者と連絡を取り合って、交流することができる。

ニュー・サウス・ウェールズ州ならではのオプション

オペラハウス

外観に注目が集まる世界遺産のオペラハウスだが、日本語による内部見学ツアー（30分）では、建物の内部の見学、構造や歴史の学習もできる。英語ガイドによるバックステージツアー（2時間）もあるので、英語学習の機会に生かせる。

シドニーマラソン

9月に開催されるフルマラソンは18歳以上、ハーフマラソンは16歳以上が参加可能。年齢制限のない10kmのブリッジランと3.5kmのファミリーランもあるので、グループ全員でハーバーブリッジを走る壮大な経験はチーム・ビルディングに最適



Australia



ビクトリア州

情報:ビクトリア州政府観光局
人口:2,400万人

ビクトリア州と教育

オーストラリアの南東部に位置するビクトリア州。州都のメルボルンはオーストラリア第2の都市として知られ、安全性、医療、文化・環境、教育、インフラの高さから、英国・エコノミスト誌の「世界一住みやすい都市ランキング」では6年連続1位に選ばれている。ビクトリア州は、“The Education State”として学習、トレーニング、専門能力の向上に力を入れており、生涯学習やSTEM戦略、国際交流などの分野で大きな改革を行っている。

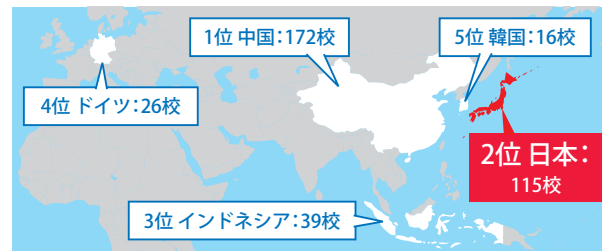


姉妹都市交流／日本とのつながり

日本語教育が盛んなビクトリア州では、州立の小・中・高、又は語学学校にて、69,000名以上の生徒が日本語を学んでいる。また、現在ビクトリアの州立学校のうち25%に当たる368校が世界33か国の学校と姉妹校提携をしているが、うち115校が日本の学校と姉妹校提携を結んでいる。これは中国の172校に次ぎ2番目に多い数である。

なお、愛知県とビクトリア州は姉妹都市の関係にあり、友好関係は今年で37周年を迎える。その他、メルボルン市と大阪市を含む17自治体で姉妹都市提携がある。

ビクトリア州の学校と姉妹校提携している上位5か国



姉妹校提携までの流れ

ビクトリア州政府では、姉妹校提携のサポートツールとして、Schools Connectというポータルサイトを提供している。このサイトは、姉妹校提携に興味を持つビクトリア州内の学校と世界中の学校を結び付けるオンラインデータベースである。自分の学校がどのようなタイプの姉妹校交流を希望しているか(派遣、オンラインなど)、具体的なビジョンを持ち、姉妹校を探すことが重要

- ① Schools Connectへ登録する
- ② 学校プロフィールを入力する
- ③ ビクトリア州内で姉妹校提携を希望している学校と直接コンタクトを取る
- ④ 合意書の作成、締結

Schools Connectウェブサイト



www.education.vic.gov.au/sisterschools

※ビクトリア州の私立校との姉妹校提携を希望する場合、Schools Connect経由ではなく、私立校協会を通してのアプローチとなる。下記サイトから学校へ個別にコンタクトを取る(全ての私立校が加盟しているわけではない)。

[Independent Schools Victoria\(ビクトリア州私立校協会\)ウェブサイト](http://www.independentschools.vic.edu.au)
www.independentschools.vic.edu.au/

州政府は上記ポータルサイトを通して提携までの「入口」を提供しているが、具体的な学校間の交流プログラムや条件などには関与しておらず、学校間で自由にやり取りをすることができる。姉妹校は学校間の提携であるため、例えばビクトリア州A校と日本のB県教委など、異なる立場間の提携は行っていない。

もし日本側が複数校対象の提携を希望する場合は、そのうち1校を代表校(窓口)として姉妹校提携を結び、交流や派遣の際は複数校から参加生徒を募る形なら問題ない。



ビクトリア

交流事例



IT技術を利用したオーストラリアの児童との交流

🇯🇵 北谷小学校・北谷町教育委員会（沖縄県／公立）
 🇦🇺 Yarra Primary School（オーストラリア／ビクトリア州）

参加人数 約30名（1クラス）

概算費用 0円（手紙や贈り物等を省く。）

交流開始のきっかけ・経緯

沖縄県北谷町ではIT技術を利用した外国の児童たちとの交流を検討していた。英語圏で、ネットワーク環境が整い、時差が少ない国を探していたところ、オーストラリア・ビクトリア州政府から日本との交流を希望している小学校の紹介を受けた。

主要内容

- 1年に2、3回のSkype™を使った交流を行うほか、英語で手紙の交流を行っている。Skype™交流では、児童がジェスチャーゲームや学校生活、伝統行事、伝統工芸品（シーサー、三味線）などを簡単な英語でオーストラリアの児童たちに紹介。また逆にオーストラリアの楽器や動物などを紹介してもらう。
- 2手紙での交流 日本・沖縄に関する伝統文化的な物を郵送

効果

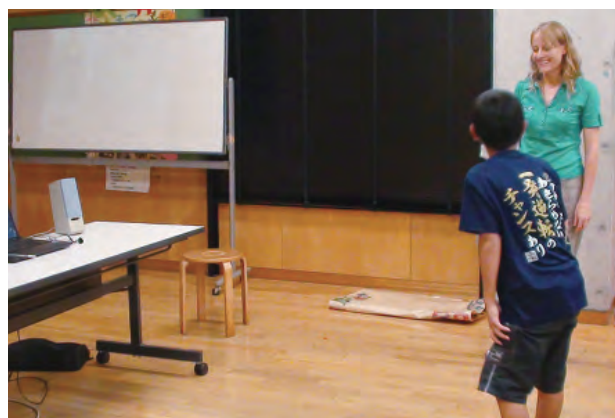
交流先であるYarra Primary School は将来的に日本を訪れ、児童の人的交流を検討してくれている。それに先駆け、2015年には6人の教員が来日し学校訪問を果たした。先生方と授業や給食などを一緒に過ごすことで、児童たちがより充実した国際交流を行うことができた。

今後に向けて

- 普段の授業と交流授業の時間とを計画的に調整することが難しく、結果として一年を通して親交を深めていくに至らず、単発的な交流となる傾向にある。
- 継続的に交流を進めていくためには、学校側が主体となり取り組むことが必要



Skype™を用いての交流



Skype™を用いての交流



Yarra Primary Schoolの先生方が訪問



校内を案内した様子

Australia



クイーンズランド州

情報:クイーンズランド州政府
駐日事務所
人口:478万人

クイーンズランド州と教育・国際交流

クイーンズランド州はオーストラリア北東部に位置し、州都のブリスベンをはじめ、ケアンズやゴールドコースト、世界遺産グレートバリアリーフなどオーストラリアを代表する観光地を有す。また、同州は観光業と併せ教育産業も主要産業の一つであり、世界トップクラスの大学や研究機関が集中し、海外からの留学生やスタディツアーの受け入れも非常に積極的である。同州と日本との交流は歴史的に古く、現在約30組が姉妹・友好都市関係にあり、文化・経済・スポーツなど多岐にわたる交流を行っている。また、クイーンズランド州は日本語学習者数が約11.7万人と豪州内で最も多く、全豪35.7万人いる日本語学習者の3割を占める。日本への興味関心が高く友好的である。

同州教育省は東京都教育委員会と教育覚書を締結している。



姉妹校提携までの流れ

日本の教育機関がクイーンズランド州の学校と交流を希望する場合、年に1度開催されるオーストラリア留学フェアへの参加が安心かつ効率的である。留学フェアではオーストラリア全土から60校を超える教育機関が来日し、直接担当者と話すことができる。このフェアの主目的は留学を志す方への情報提供であるが、学校関係者が将来的な

姉妹校・友好校を探す機会にもなっている。留学フェアへの参加が難しい場合、クイーンズランド州政府 駐日事務所へ直接コンタクトを取り、目的やニーズに合った交流先・プランの提案を相談することも可能。また、民間の旅行代理店では、姉妹校提携やスタディツアーなどの国際交流事業の一貫したサポートを提供しているところもある。

スタディツアー・プログラム

クイーンズランド州は学校間国際交流の一つとして、公立校でのスタディツアー・プログラムが充実している。これは、クイーンズランド州教育省が公的に認定した公立校をホスト校とし、海外からのグループの短期受け入れを行うプログラムで、スタディツアー中は英語研修に加え、オーストラリアの文化体験や現地校生徒との交流、専門研修などを行う。

また、私立校によるスタディツアーも充実しており、公立校・私立校ともに、夏期休業期間や修学旅行の海外短期プログラムとして人気がある。

フレキシブルなプログラムであるため、各グループの学習目的に合わせた専門的な授業や実習を組み込むこともできる。

専門研修の例

- グローバルリーダー（リーダーシップ講習、ディスカッションなど）
- サイエンス（海洋、農業、環境、健康科学の実験学習や研究施設訪問など）
- スポーツ、音楽、芸術、クリエイティブ産業での優れたプログラム
- 国際バカロレア校での研修プログラム

実施スケジュール例

1日目	月	午前:到着空港でのレセプション/歓迎会/ オリエンテーション 午後:ホームステイ先へ
2日目	火	午前:英語レッスン 午後:学校プログラム
3日目	水	午前:英語レッスン 午後:学校プログラム
4日目	木	遠足(終日)
5日目	金	午前:英語レッスン 午後:バディーとお別れランチ、スタディツアー 参加証明書の授与
6日目	土	ホストファミリーと過ごす
7日目	日	ホストファミリーと過ごす
8日目	月	学校でフェアウェルパーティー後、帰国のため 空港へ

ターム留学

スタディツアーの他にクイーンズランド州で積極的に取り入れているのが「1学期(ターム)留学」である。オーストラリアは4学期制を採用しており、1学期は約10週間。その期間、オーストラリアの中学・高

校生活を体験することができる。スタディツアーでの経験をきっかけに、その先の国際交流の形としてターム留学が広がっている。



独自のグローバルリーダー研修で 世界にはばたく人材を

🇯🇵 成城中学校・高等学校(東京都/私立)

🇦🇺 Chancellor State College / Burnside State High School

(オーストラリア/クイーンズランド州)

※2016年度の場合。ホストスクールは年によって異なる。

参加人数 30~50名程度
(中学3年~高校2年の
希望者)年によって異なる

概算費用 37.9万円

交流開始のきっかけ・経緯

グローバル人材育成のため、クイーンズランド州政府 駐日事務所へ研修の提案を依頼。教員による現地視察を経て交流開始。現在は民間エージェントのアレンジサポートの下、クイーンズランド州との交流を続けている。

主な内容

8月中旬から約2週間の短期研修。生徒を2グループに分け、2校のホストスクールで研修を行った。スポーツ&リーダーシップ、コミュニケーション等、グローバル人材として必要なスキルを学ぶことが主目的で、クイーンズランド大学へ訪問し、大学生とのディスカッションや最先端医学研究室での研修なども体験。その他様々なトピックにおいて、講義やワークショップ、科学実験を行った。

効果

海外の大学進学希望や国内のグローバル系大学への進学希望が増えた。



TRI(臨床医学研究施設)では遺伝子工学の実験も行った。

実施スケジュール例

1日目	月	学校集合/成田空港→ゴールドコースト空港
2日目	火	ゴールドコースト空港到着 レクリエーションセンターへ スポーツ&リーダーシップ研修
3日目	水	午前:レクリエーションセンターで スポーツ&リーダーシップ研修 午後:ホストスクールへ移動、 ホストファミリーと対面
4日目	木	午前:オリエンテーション及びキャンパスツアー パティ&ウェルカムランチパーティー 午後:英語レッスン/ スクール・インテグレーション
5日目	金	ホストスクールでの活動 午前:オーストラリアの文化学習 午後:スクール・インテグレーション
6日目	土	ホストファミリーと過ごす
7日目	日	ホストファミリーと過ごす
8日目	月	ホストスクールでの活動 午前:英語レッスン 午後:スクール・インテグレーション
9日目	火	クイーンズランド大学訪問 午前:キャンパスツアー/ 大学生とカンパセーション 午後:クイーンズランド大学講師による レクチャー
10日目	水	グリフィス大学(最先端医学研究室)での研修 大学生生活、研究室の紹介。トピックについて 講義やワークショップ、科学実験など
11日目	木	ホストスクールでの活動 午前:英語レッスン 午後:フェアウェルランチパーティー
12日目	金	ホストファミリーと最後の別れを告げて空港へ ゴールドコースト空港→成田空港

02

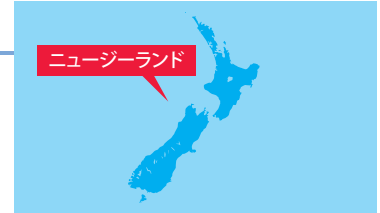
New Zealand

ニュージーランド



交流上の特徴

- 姉妹都市提携は40件超。ニュージーランドで学ぶ留学生の出身国で日本は3位
- 政府が世界に先駆け、留学生の受入れ体制を整えるため、「留学生の生活保障に関する服務規程」を定める。
- 時差も3～4時間と少なく、授業時間内でのテレビ電話等による交流も可能
- 日本の夏期休業期間に授業があるため、夏の短期交流にも対応可能



基本情報

ニュージーランドの小・中・高校は約2,500校で9割以上が公立校。そのうち500余の学校が何らかの国際交流に関するプログラムを実行している。日本はニュージーランドへ留学する学生の出身国籍トップ3に入る(1位中国、2位インド)。国策としても留学生受入れに力を入れており、酪農、観光、畜産に次ぐ第4位の産業である。政府では留学生を受け入れる全ての教育機関に服務規定を設け、留学生の福利厚生及び提供する教育環境の向上に努めている。2015

年留学生を受け入れる小・中・高校を取りまとめる団体The School of International Education Business Association (SIEBA)を新設。SIEBAに属する学校群は、留学生の受入れ体制の強化に努めており、新たに国際交流校を検索する際の推奨される学校群である。留学生を受け入れる学校のほとんどはESOL^{*}と呼ばれる留学生のための英語教育を学内で提供する。入学希望者の英語力には、最低条件を設けていない学校が多く、内申書の審査が中心となる。

*ESOL=English for Speakers of Other Language

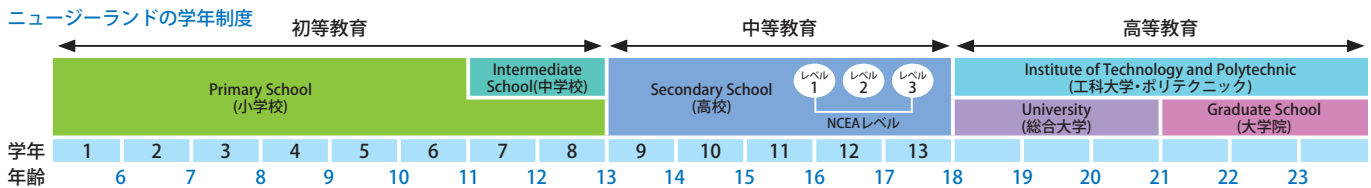
教育制度

学年制度

義務教育は16才である11年生まで。義務教育修了後は大学進学準備課程の12、13年生へ進む場合と、国立の工科大学・ポリテクニク私立専門学校へ進む場合に分かれる。中学・高校では必修科目が少なく、興味及び進路に合わせた選択科目が多い。ケンブリッジ国際検定や国際バカロレアプログラムを提供する学校は増加傾向

学期編成

ニュージーランドの学期は1月末からスタートする4学期制(各10週間)で、各学期間に約2週間の長期休暇がある。現地の夏期休業期間は12月から1月末にかけてであり、日本の夏期休業期間にも通常の授業が行われていることから、多くの短期交流活動が実施されている。



出典: Study in New Zealand Vol.2

(※「college」は日本では主に大学を意味するが、欧米では中学、高校を指して用いられることがある。「institute」、「academy」は広く「教育機関」という意味で使われる。)

ニュージーランドの中学・高校の学期制度の例

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
休み	Term1		休み	Term2		休み	Term3		休み	Term4	

交流開始の窓口

ニュージーランドの小・中・高等教育機関への留学促進、広報はエデュケーション・ニュージーランドが行っており、日本の同機関の窓口はニュージーランド大使館内にある。毎年1回東京で一般向けにニュージーランド留学フェアを開催しており、また、その前後で教育関係者向けの

マッチングセミナーも開催。ニュージーランドの交流先を探す場合の最初のステップはフェアの参加である場合がほとんど。フェア以外の時期にエデュケーション・ニュージーランドに交流相手の学校を照会することもできるが、視察や交流詳細についての交渉は直接学校間で行う。

その他

従来のセカンダリースクール(中学・高校)に加え、交流先としてトレンドとなりつつあるのが、工科大学・ポリテクニクである。工科大学・ポリテクニクは11年生(高校2年生)から入学でき、ニュージーランドに8校しかない総合大学と比較すると柔軟で、専門性の高い

ニーズに応えるプログラムを提供することが可能。近年増加する観光業・サービス業の研修にも対応。一方、工科大学・ポリテクニクの学生生活は大学に近く、文化交流・国際体験に重点を置くプログラムの場合は従来どおり、中学・高校が推奨される交流先である。

交流事例



大震災の被害を受けたクライストチャーチを訪問 異文化体験と同時に「震災と復興について」他国の例を学ぶ

東洋大学附属牛久中学校・高等学校 (茨城県／私立)
 Ara Institute of Canterbury
 (ニュージーランド／クライストチャーチ)

参加人数 希望者13名 (28年度)
概算費用 52.5万円
※10万円は茨城県留学支援金
交付事業より助成あり

交流開始のきっかけ・経緯

ニュージーランド大使館教育担当官に相談し、現地の学校及び広報担当者を紹介してもらった。事前に打合せを行い、日本からの生徒派遣と内容骨子を決めた。

主な内容

2011年の大震災被害を受けたニュージーランド、クライストチャーチを訪問し、国際文化体験とともに、他国の震災からの復興プロセスに学ぶ3週間。「震災と復興」をテーマに地震からの復興プロジェクト研究を課題とし、平日午後にはフィールドワークとして関係機関を視察、講義受講などを行う。研修校Ara Institute of Canterbury(旧クライストチャーチ工科大学)は、メディア、デザイン、獣医学、音楽など広範な学問において定評のある国立の職業専門大学。同大学付属英語コースにて平日午前は主に英語学習、参加者のレベルに合わせて、他国や他大学の学生と一緒にインターナショナルクラスにてレッスンを受講する。ホームステイ先は「留学生の生活保障に関する服務規程」にある厳しい審査基準をクリアした家庭であるため、安心して参加できる。

効果

日本とニュージーランドの防災に対する意識の違いやボランティア活動など市民参加の方法の違いなど、体験を通じて学習することができた。高校1年から3年まで、学年をまたいで応募してきた参加者は互いに尊重し合い、社会性を身に付けることができた。生徒自身のコミュニケーション力や英語力不足を認識し、英語の授業・英検やTOEIC®に真剣に取り組む等の効果があった。

効果測定

参加者へのアンケート調査及び参加者による現地報告書の作成、留学後には英検やTOEIC®等の検定試験を受験



震災と復興をテーマとした講義を受講

実施スケジュール例

1日目	成田空港発、オークランド経由でクライストチャーチへ。
2日目	午後:クライストチャーチ空港着。着後、現地校スタッフの出迎えを受け、Ara Institute of Canterbury校へ。その後ホームステイ先へチェックイン。
3日目	語学研修初日。オリエンテーション、レベルチェックテスト。
4日目～27日目	月曜～金曜 午前:インターナショナルクラスにて英語研修。 午後:クライストチャーチ震災被害からの復興の過程について、関連機関への訪問や講演などを通じて理解を深める。 訪問先例:クライストチャーチ大聖堂跡、クライストチャーチアートギャラリー、カードボード大聖堂 土曜 テカポ湖(世界遺産)など、ニュージーランドの名所を見物。 日曜 ホームステイ先で自由行動。
28日目	フェアウェルパーティー。
29日目	早朝:ホストファミリーに別れを告げ、クライストチャーチ空港へ。 空路オークランド経由にて帰国の途へ。 夕方:成田空港着。着後解散。



倒壊したクライストチャーチ大聖堂。再建までには約10年を要する。



現地受入れ校Ara Institute of Canterbury校は国立の職業専門大学



震災で倒壊した大聖堂の再建までの仮の大聖堂、カードボード大聖堂も訪問先の一つ。

03

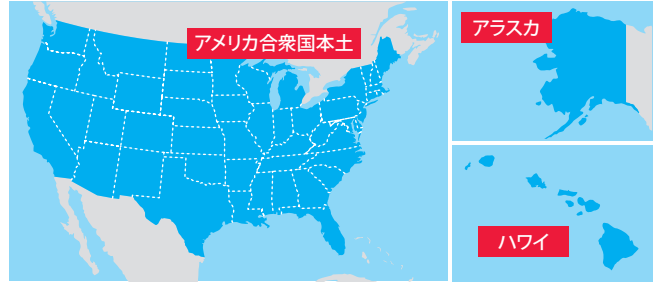
United States of America

アメリカ合衆国



交流上の特徴

- 日本人の留学先として最も人気が高く、全体の約24% (12,500人) を占める。 ※平成26年度JASSO調査
- 多文化主義の中でグローバルな視野と主体性を持つことができる。
- 名門と言われる大学が多く、海外進学を検討している生徒にとって進路選択の一助となる。



基本情報

政治・経済、エンターテインメントなど、あらゆる分野で世界の最先端をいくアメリカ。温暖で観光地の多い西海岸や歴史的でアカデミックな雰囲気をもつ東海岸など、広い国土のメリットを生かし様々な体験ができる。また、教育においても高い水準を誇り、その多様性・柔軟性から日本人の留学先として最も人気が高い。高校卒業後に、

アメリカの大学への進学を検討している場合、大学視察や現地学生との交流を研修プログラムに組み込むことで情報収集の機会にもなる。アメリカ大使館では、アメリカンセンターJAPAN (広報・文化交流部)からの情報として、留学イベントや講演会などを提供している。

教育制度

学年制度

初等・中等教育の期間は日本と同じ12年間だが、学年区別や義務教育期間は州・学区によって異なる。学年は6-3-3制や5-3-4制などが一般的。また、幼稚園年長 (Kindergarten) から高校 (12年生) までの13年が無償教育の対象期間で「K-12」と呼ばれる。

学期編成

学年区分同様、各学期の期間も地域や学校により異なるが、セメスターと呼ばれる2学期 (秋学期・春学期) やクォーターと呼ばれる4学期制が一般的。セメスター制の場合、新学期は8月中旬から9月初旬に始まり、翌年5月下旬から6月下旬で1学年が終了となる。

アメリカ合衆国の学年制度

	Elementary School					Junior High School			High School			
	Elementary School					Middle School			High School			
学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
年齢	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18

(※「college」は日本では主に大学を意味するが、欧米では中学、高校を指して用いられることがある。「institute」、「academy」は広く「教育機関」という意味で使われる。)

アメリカ合衆国の中学・高校の学期制度の例

月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
セメスター制	Fall Semester				休み	Spring Semester				休み			
クォーター制	休み	Term1			休み	Term2		休み	Term3		休み	Term4	

交流開始の窓口

民間の旅行代理店が姉妹校提携のサポートや海外研修のアレンジをトータルで請け負い、交流がスタートする例が多い。また、学校関係者が元々持っているコネクションから交流が始まることもある。

04

Canada
カナダ



交流上の特徴

- カナダの英語は方言やアクセントがほとんどなく、日本人にも聞き取りやすい。
- 世界で初めて多文化主義を政策として取り入れた国。地域社会の国際意識が高い。
- 国の安全性と暮らしやすさ、清潔さは世界トップクラス
- 教育水準が高く、OECDによる生徒の学習到達度調査では常にトップ10入りしている。



基本情報

カナダは世界から年間約200万人以上の人々・民族を移民として受け入れており、5人に一人が海外生まれと言われている。多民族共生の好事例として「モザイク社会」と形容されることが多い。英語とフランス語の2言語を公用語としていること、移民出身者が多いことから、第2言語教育において長い歴史と実績を持つ。教育に対しての

意識が高く、OECDによる生徒の学習到達度調査 (PISA) では調査開始当初より全ての分野において常にトップ10入りしている。国際意識と教育水準の高さ、そして外国人にとって住みやすい環境を兼ね備えたカナダは留学先として人気の国であり、世界中から毎年30万人を超える留学生を受け入れている。

教育制度

カナダの中学・高校は私立と公立を合わせると約5,500校あり、その大半が公立校である。連邦国家であるため、それぞれの州が独立した自治権を持ち、教育においても各州政府が管轄している。義務教育年齢から必修科目、入学基準、学制まで州が独自に設定してお

り、教育改革も各州政府が必要に応じて積極的に実施している。交流先を検討する際の窓口も各州政府となる。ブリティッシュ・コロンビア州とアルバータ州は日本の州政府事務所に教育担当が所属しているので、日本語で相談することができる。

学年制度

カナダの学年制度は州によって大きく異なる。例えば、アルバータ州は日本と同じように小学校6年間と中学・高校が3年ずつという制度になるが、ケベック州では小学校6年間と中学・高校を併せたものが5年間という制度をとっている。

学期編成

学期制度も州によって異なるが、一般的な学年度は8月中旬から9月上旬に始まり、翌年の5月下旬から6月末に終わる。2学期制をとっている学校は、9月から1月までが1学期、2月から6月までが2学期になる。夏期休業期間のほかに、7~10日間のクリスマス休暇と5日間程度の春期休業期間がある。

カナダの教育制度

年齢	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		高等教育
ニューファンドランド・ラブラドル州／ プリンス・エドワード・アイランド州／ ニュー・ブランズウィック州／アルバータ州／ ノバスコシア州	Elementary School 6年制小学校						J.H.S.* 3年制中学校			S.H.S.* 3年制高校			University College 大学	
ケベック州	I	II	III	IV	V	VI	High School 6年制高校					CEGEP 短大	University 大学	
オンタリオ州／マニトバ州	Elementary 8年制小・中学校								Secondary 4年制高校				OAC	University College 大学
サスカチュワン州	Division I			II			III			IV			University College 大学	
Elementary 6年制小学校	Secondary 6年制中・高校												University College 大学	
ブリティッシュ・コロンビア州	Elementary 7年制小学校						Secondary 5年制中・高校						University College 大学	

(*J.H.S.=Junior High School / S.H.S.=Senior High School)

※1~3年間の幼稚園も義務教育に含まれるが、上記の図では省略している。

※「college」は日本では主に大学を意味するが、欧米では中学、高校を指して用いられることがある。「institute」、「academy」は広く「教育機関」という意味で使われる。

カナダ学期制度の例

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ブリティッシュ・コロンビア州 2学期制の場合	3学期		夏期休業期間			1学期			2学期		3学期	
アルバータ州 3学期制の場合	2学期		夏期休業期間			1学期				2学期		

※同じ州の中でも学期制が異なる学校もある。

Canada



ブリティッシュ・コロンビア州

情報: 在日カナダ ブリティッシュ・コロンビア州政府事務所
人口: 467万人

ブリティッシュ・コロンビア州と教育・国際交流

ブリティッシュ・コロンビアはカナダ最西端にある州。住みやすさに定評があり、英経済紙「エコノミスト」より発表された「世界の住みやすい都市ランキング」では同州バンクーバーが3位となっている。海外からの移住者が多く、毎年数万人の移民を受け入れている。一部の私立を除き、高校までは語学を含めた入学試験がない（英語のクラス編成のための語学力テストはある）。大半の学校がESLの授業を提供しているため、外国人の生徒にとって学びやすい環境が整っている。

ブリティッシュ・コロンビア州は日本の33都市と姉妹・友好都市提携をしており、同州教育省は東京都教育委員会とも教育覚書を締結している。



教育制度

ブリティッシュ・コロンビア州の学校区分は初等教育と中等教育の二つに分かれている。日本の幼稚園年長にあたるK (Kindergarten) から日本の中学1年生までの8年間をエレメンタリー・スクール、中学2年から高校にあたる5年間をセカンダリー・スクールとしている（日本のように三つに区分している学校もある）。2学期制か3学期制が主流だが、学期を分けない通年制を採用している学校もある。高校卒業に必要な科目を修了する

とブリティッシュ・コロンビア州の高校卒業資格であるDogwood Diplomaを授与される。履修科目については新しいカリキュラムに移行中であるため、各教育委員会や私立学校に最新の情報を確認する必要がある。

なお、ブリティッシュ・コロンビア州は高校留学専用の日本語サイトを持っている。

<https://bcforhighschool.gov.bc.ca/ja/jp-home-page/>

姉妹校提携までの流れ

ブリティッシュ・コロンビア州は州政府事務所を日本に持っており、姉妹校提携のサポートも行っている。具体的な交流プランや要望を伝え、受入れが可能な教育委員会とマッチングのサポートをしてくれる。必要に応じて英語でのやり取りも補助してくれる。また、カ

ナダ大使館主催の留学フェアでは複数の現地の教育委員会と学校、在日州政府事務所が出展している。留学フェアでは教育委員会や学校と直接話すことができ、提携のきっかけが作りやすい。必要に応じて州政府事務所にサポートしてもらうことも可能

交流に関する方針・要望

- 州政府事務所に相談する場合は、交流プランや要望を具体的にまとめておくと、より希望に近い教育委員会や学校が見付かりやすい。
- 7月、8月の夏期休業期間は生徒が不在になるため、基本的には交流活動を企画するのが難しいが、教育委員会か学校に個別で相談するとオーダーメイドで対応が可能な場合もある。学校が教育委員会に相談してほしい。
- 同じ学校が一度に大人数を受け入れるのは難しい場合が多い。
- 日本人の受入れは積極的な学校が多いが、現地校からの送り出しは実績があまり多くない。



バンクーバー

ブリティッシュ・コロンビア州の学校と提携するメリット

- 外国人生徒を受け入れる体制と環境が整っている。
- 学校のカリキュラムが標準化されており、学校の質において地域間格差がない。全ての学校で高いレベルを保っている。
- 治安がよく、生活インフラが整っているため、安心して生徒を送り出せる。



ウィスラー

交流事例



語学学校と姉妹校で、多様な研修を実現

🇯🇵 祇園北高等学校(広島県/公立)
 🇨🇦 D.W. Poppy Secondary School
 (カナダ/ブリティッシュ・コロンビア州)

参加人数 16名
 期間 16日間
 概算費用 約45万円

交流開始のきっかけ・経緯

広島県では各県立学校が姉妹校提携をすることとしており、現地留学エージェントなどと連携して学校訪問、提携締結に至った。

主な内容

語学学校での研修を1週間、姉妹校との交流を1週間組み合わせたプログラムを実施。現地の生徒とともに学校生活を送る中で、ホッケーなどカナダ特有のスポーツを楽しむ体育の授業や、クレヨンを使った作品を作る美術の時間を特別に組んでもらった。また、姉妹校という関係を生かして、自分達の学校の紹介を英語でプレゼンテーションするという機会を設けた。

効果

- 自分たち自身が日本のことを深く知らないことに気が付く。
- 長期留学を将来的に考える生徒が増えた。
- 思い通りにいかない体験をすることで、保護者の方々への感謝の気持ちを感じた生徒が多かった。

今後に向けて

- プレゼンテーションは、代表者だけではなく全員が行う機会が必要である。また、一方的な発表ではなくディスカッション形式にすることで更なる充実感が生まれる。
- 事前・事後の準備や指導が重要。語学のみならず、現地の生活習慣や文化に対する理解を深めておき、積極的に議論できる環境を両校で整えることが大切である。

実施スケジュール例

1日目	成田～バンクーバーへ移動
2～7日目	語学学校にて研修
8日目	デイトリップ
9～13日目	D.W. Poppy Secondary Schoolにて研修
14日目	デイトリップ
15日目	バンクーバー発
16日目	成田着

交流事例



1家庭1名のホームステイと充実の教育プログラム

🇯🇵 三輪田学園中学校・高等学校(東京都/私立)
 🇨🇦 Valley Christian School
 (カナダ/ブリティッシュ・コロンビア州)

参加人数 38名
 概算費用 50万円

交流開始のきっかけ・経緯

業者に依頼し、^{あっせん}斡旋してもらった。その後、校長と英語科教員による現地視察を経て送り出しを決定した。

主な内容

日本人生徒4人に対して1人のパディをつけ、5人グループで様々な学習・活動を進めるようにしている(老人ホームを訪問しての日本の文化の紹介、ビクトリア・バンクーバーの視察、映画鑑賞など)。ホームステイ先も、1家庭に1名とすることで、できる限りコミュニケーションの機会を増やすようにしている。最終日のお別れ会では、ただ別れを惜しむ会にするのではなく、これまでの学習内容を発表する機会を設けていて、その準備もまたパディとともに進めるようにしている。

効果

- 1家庭1名のホームステイなので、英語でのコミュニケーションの重要性を痛感する。
- 異文化への興味関心が高まる。

- 日本の生活や両親への感謝の気持ちが高まる。

課題

- 帰国後に、留学経験を活かす継続的な取組が確立されていない。

実施スケジュール例

1日目	成田～バンクーバーへ移動
2日目	学校にて研修スタート パディとの対面
3～9日目	学校での研修 老人ホームを訪問 ビクトリア・バンクーバー視察研修
10日目	UBC訪問
11～13日目	ホストファミリーと行動
14日目	現地発
15日目	日本着

交流事例



現地の生徒と「バディ」を組み合わせることで、 交流がより身近なものに

西城紫水高等学校 (広島県／公立)
 Aldergrove Community Secondary School
 (カナダ／ブリティッシュ・コロンビア州)

参加人数 2名

概算費用 30万円

交流開始のきっかけ・経緯

グローバル社会に対応できる幅広い視野を持ち、主体的に行動するコミュニケーション能力を身に付けさせるため、県の教育委員会から姉妹校の提携を推奨された。

主な内容

留学生用のクラスでの授業のほか、学校での生活を手助けしてくれる現地の生徒（バディ）たちと一緒に授業を受けた。最終日にはその生徒たちと一緒に特別なランチを食べた後、ドリームキャッチャーを作り、お別れの挨拶をした。生徒たちは最初は緊張していたが、最終日にはリラックスして自分からAldergrove Community Secondary Schoolの生徒に話し掛ける姿も見られた。

効果

- 相手国に対する理解が高まり、興味関心が向上する。
- 海外に出てみたい、行ってみたいと考える生徒が増加している。

効果測定

- アンケート、感想文の提出
- 全体報告会の実施

必要な調整

- 交流実施時期の調整
- 交流費用の確保
- 交流内容・日程などを調整する際の、スムーズな連絡方法

実施スケジュール例

1日目	日本→現地へ移動
2日目	学校案内
3～6日目	学校にて、バディとともに授業 アクティビティへの参加 共同での制作作業など
7日目	現地発
8日目	日本着

交流事例



英語力を超えた コミュニケーションの大切さを実感

北海道広尾高等学校 (北海道／公立)
 Brooks Composite High School
 (カナダ／アルバータ州)

参加人数 送り出し:4名／受入れ:4名

期間 8日間

概算費用 送り出し:5万円／受入れ:0円

交流開始のきっかけ・経緯

以前の校長が国際交流推進協議会を立ち上げ、自らカナダを現地調査した結果、Brooks Composite High Schoolを選定し、姉妹校として提携を結んだ。

主な内容

4月にカナダから4名の生徒が来日し、本校の受入れ家庭で8日間ホームステイをする。交流内容としては、授業や学校行事の見学・体験、周辺の観光など。9月には広尾からカナダ／ブルッククス市へ行き、現地の中学校や高校での授業に参加する。また、小学校に訪問して小学生に日本のことを教えるなどの交流を図る。フィールドトリップでは、近くの町を尋ねて国立の恐竜博物館を訪れたり、原住民資料館やダムを見学したりする。カナダ特有の広大な平野は、北海道に慣れている生徒でも大きな感動を受ける。

効果

英語力を身に付けることはもちろん、コミュニケーションの大切さや国境を越えた友情の尊さを知ること。生徒が経験したことを発表したり収録を作成したりする経験から学びを深め、成長できる。

効果測定

発表会などの参加者や運営者からアンケートを取っている。

今後に向けて

ホームステイの受入れに関して、授業内で呼び掛けを行い、保護者へも案内しているが、受入れ家庭が集まりにくい。



アルバータ州と教育

アルバータは西から2番目に位置する州。天然資源が豊富で、エネルギー、農業、林業、工業、情報通信技術などを主要産業としている。インフラが整っており、カナダで唯一州の消費税がなく、留学生にとって暮らしやすい環境が整っている。カナダ国内最先端のナノテクノロジー研究施設があり、Alberta Innovatesという研究・技術革新組織を州として持つほど研究開発が盛んである。

アルバータ州の教育制度は日本と同じように小学校が6年間と中学校・高校が3年ずつある6-3-3制を採用している。9月から1月までが1学期、2月から6月までの2学期制が一般的である。幼稚園から12年生までの教育を州の教育省が管轄しており、その管下にある複数の教育当局が所轄学区内の学校を管理している。州による統一学力試験を小学校3年生と6年生、中学校3年生の計3回、5月から6月ごろに実施している。



姉妹都市交流／日本とのつながり

アルバータ州は17の都市と姉妹・友好都市提携をしており、北海道とは1972年より姉妹提携を結んでいる。同州と北海道の両地域間では、学術、文化、スポーツなど、幅広い分野での交流が盛んである。州南部にあるレスブリッジには沖縄出身者を祖先に持つ日系カナダ人が

多く、それをきっかけに沖縄県の南風原町と姉妹都市提携をしている。また、天然資源の豊かさに強みを持つことから、大手商社や大手製紙会社をはじめとする日系企業がカナダの拠点をアルバータ州に設けている。

姉妹校提携までの流れ

アルバータ州はブリティッシュ・コロンビア州と同様、州政府事務所を日本に持ち、カナダ大使館主催のカナダ留学フェアにも参加している。アルバータ州の場合、教育当局と提携することが一般的であるため、カナダ留学フェアにはアルバータ州より一部の教育当局が出展す

る。また、アルバータ州政府在日事務所も出展しているため、必要に応じて希望の交流活動に合う学区を案内してもらえる。フェアを利用せず、州政府事務所に直接相談する場合は、具体的な交流プランや要望を伝えると、受入れが可能な教育当局管轄区とマッチングしてくれる。

交流に関する方針・要望

- 日本人学生の受入れを積極的に行っている。
- 州全体の生徒数が日本よりも少ないことから、少人数からの国際交流であると比較的实施しやすい。
- 短期交流は2～3週間でも可能だが、3か月以上の交流の方が双方にとって有意義な交流に発展する。
- 可能であれば企画担当者に現地を視察してほしい。
- ホームステイ先を確保するため、サマーキャンプの参加以外は夏期休業期間ではないの時期の交流が望ましい。
- 州政府事務所に相談する場合は、交流プランや要望を具体的にまとめておくと、より希望に近い教育委員会や学校が見付かりやすい。



アルバータ大学

アルバータ州の学校と提携するメリット

- 日本人を含め、一つの国籍の留学生が1校に集中しないよう、国籍のバランスについて配慮しているため、国際色豊かな環境で文化の多様性を学ぶことができる。
- ホームステイの基準が厳しい。戸建て、もしくはリンクハウス（中庭を囲む戸建て）で、窓があるひとり部屋を用意できないと現地ではホームステイ先として学生を受け入れられない。
- 学校のカリキュラムが標準化されており、学校の質において地域間格差がない。



カルガリー

05

the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland

イギリス



交流上の特徴

- 政府や教育団体が定めた厳しい基準を満たしているため、教育の質が高い。
- 多様性に富んだ文化の中で、価値観を変えるような経験ができる。
- ボーディングスクールならではの伝統的な寮生活を体験できる。



基本情報

イギリスは四つの国で構成されている連合王国であるため、それぞれの国で異なった教育制度を採用している。英国全土の小中学校のうち95%が公立校だが、一般的に日本人留学生は公立校に入る権

利がないため、私立校に通うことになる。私立校のうち、500校以上が「ボーディングスクール」と呼ばれる全寮制の学校である。

教育制度

学年制度

イギリスの教育期間は5～18歳の13年間（スコットランドでは5～17歳、北アイルランドでは4～18歳）。義務教育を修了する16歳でほぼ全ての生徒がGCSEと呼ばれる試験を受験し、その後2年間、大学への入学に必要な統一試験であるGCE-Aレベルに向けた勉強をする。

学期編成

イギリスの学期は日本と同じ3学期制だが、9月に新学年が始まる。日本とイギリスの夏期休業期間は時期が重なるため、短期の研修でも寮制の学校に通うことができる（現地の生徒が帰省するため、寮が空く。）。反面、現地の学生と交流する機会は減ってしまう傾向にあり、派遣時期には注意が必要

イギリスの学年制度

		Primary Education	Secondary Education	Sixth Form Education, Further Education
イングランド&ウェールズ	年齢	5～11歳	11～16歳	16～18歳
	学年	1～6年	7～11年	12～13年
北アイルランド	年齢	5～11歳	11～16歳	16～18歳
	学年	2～7年	8～12年	13～14年
スコットランド	年齢	5～11歳	11～16歳	16～17歳
	学年	2～7年	8～12年	13年

※上記区分は一般的なものであるが、例外もある。

イギリスの学期制度の例

9月上旬～12月中旬	12月中旬～1月上旬	1月上旬～3月下旬	4月上旬	4月中旬～6月上旬
秋学期	冬休み	冬学期	春休み	春学期

交流開始の窓口

英国に拠点を置く団体、ジャパン・ソサエティ（日本協会）では交流校探しから交流の準備、実践までの支援を行っている。交流を希望する場合は、同協会の公式サイトから申請を行うと希望条件に合わせて英国の交流候補校を探してくれる。交流内容については学校間で自由に決められるが、同協会では必要に応じて交流内容に関する相談も受け付けている。また、Japan UK Live!というポータルサイトを運営しており、交流校専用のホームページ作成ツールやメッセージ機能に加

え、メッセージの翻訳サービスも提供している。

イギリスの公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルでは、具体的な交流プランや要望を伝えると、英国教育機関向けの専用ウェブサイト提携希望校を募集してくれる。また、担当者名と連絡先を含む応募校のリストを提供してくれるので、提携希望校と直接やり取りすることができる。

交流開始にあたって

- 求める交流の内容を具体的に記載すると、希望に合う学校が見付かりやすい。
- 頻度は少なくとも、継続して交流することが望ましい。
- クリスマスの時期の派遣は避けた方がよい。

交流事例



児童同士が1対1の関係をつくるために「マイフレンド」を設定

🇯🇵 五條市立北宇智小学校(奈良県／公立)
 🇬🇧 Ysgol Gymuned Y Fali (イギリス／ウェールズ)

参加人数 84名(うち、相手国32名)

概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

ロンドンの日本人学校に勤務経験のある教員が、JAPAN UK LIVEを通じて打診した。

主な内容

担任同士がコンタクトを取り、お互いのクラスの児童のリストを交換。学校対学校の関係ではなく、児童対児童の関係をつくるためのペアを作った。児童は自分の「マイ・フレンド」となったペアとプロフィールを交換したり、交流用のトークボード(JAPAN UK LIVE内の掲示板)を活用したりしてコミュニケーションを図った。このサイトを通すと、日本語で送った内容を英語に翻訳して相手に伝えてくれるため、語学力に自信のない児童でも交流することができた。また、ビデオレターなどで英語を使って交流することもあった。

効果

自分の英語が伝わるのかと心配していた児童も、相手から返事が返ってくるとうれしくて英語学習への意欲が高まった。

今後に向けて

交流に対する取組は、日本とイギリスで温度差があるため、こちらが期待しているほど相手が動いてくれないことがある。時差(9時間)はもとより、長期休暇のタイミングや学期制の違いのため、なかなか返信が来ないこともよくあり、根気強く待つことも重要。児童は交流に大きな期待を寄せている。

交流事例



年齢やレベルに合わせた研修で、帰国後の学習意欲を喚起

🇯🇵 大河原町立大河原南小学校(宮城県／公立)
 🇬🇧 Escomb Primary School (イギリス／ダラム)

参加人数 15名

概算費用 22万円

交流開始のきっかけ・経緯

2011年の震災時に、北東イングランド日本人婦人会から寄付金の申し出があり、そこから交流が始まった。

主な内容

授業に参加する、英語力を上げるというよりは、積極的に現地の児童と交流させ、コミュニケーションを図ること自体を重視。児童は初日から歌や折り紙などの日本の文化を現地の児童に教えることを通じて交流を深めていく。

課外活動としてEscomb Primary Schoolの児童と一緒にダラム州内を見学する機会も設けている。日本ではめったに見られない西洋の城や教会の迫力はもちろん、町並みそのものが日本とは大きく違うことでも児童の目には新鮮に映り、異文化体験となっている。

また、近所のスーパーで買い物をすることや電車に乗ることも、児童にとっては大切な「研修」の機会である。ホームステイでの生活、学校での交流、市内の観光など、全てが新たな刺激であり、外国への関心を高めるきっかけになる。

効果

異なる文化に触れることで、「日本とは違う文化がある」という認識をもてるようになった。「もっと英語を話せるようになりたい」「将来海外交流に関わる仕事がしたい」と学習意欲を高めていた。

実施スケジュール例

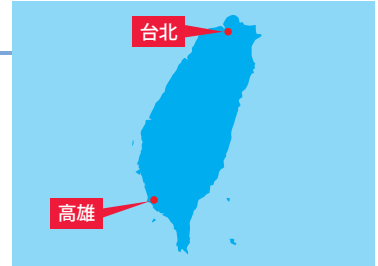
1日目	成田～ダラムへ移動
2日目	Escomb Primary Schoolにて歓迎会・交流
3日目	デイトリップ
4日目	Escomb Primary Schoolお別れ ロンドンへ移動後、市内研修
5日目	ロンドン発
6日目	成田着

06 Taiwan 台湾



交流上の特徴

- 姉妹都市、友好都市提携など60を超え、海外修学旅行先として大変人気がある。
- 台湾の政府関係機関が日本の高校生の修学旅行を積極的に誘致し、品質管理に努めている。
- 日本各地から直行便で約2～4時間という抜群のアクセス。時差は1時間
- 親日国として知られ、治安も良く、安心安全な旅行が可能



教育制度

台湾では日本と同じ 6年・3年・3年・4年制の学校教育制度が採られている。国民小学(小学校)から国民中学までの9年間は義務教育。義務教育の就学率は99.9%と非常に高く、高校への進学率は約95%、大学進学率は約70%となっている。

台湾の学年制度

学齢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
年齢	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
学校	国民小学(小学校)						国民中学(中学校)			高級中学(高校)			大学			

義務教育

● 学期は2学期制 上学期:8月1日～1月31日／下学期:2月1日～7月31日(出典:外務省)

基本情報

日本各地からわずか2～4時間で行ける台湾は、異文化交流や歴史探求に最適な国として人気がある。親日的な国民性と治安の良さから安心安全な旅行が可能。九州と同じくらいの大サイズの台湾は、見どころがコンパクトにまとまっており、時間的制限のある修学旅行向きと言

える。各地には日本統治時代の建物や遺跡が大切に保存されているため歴史学習にも役立つ。首都台北市は歴史的建造物、博物館など見どころ満載で、教育旅行や姉妹校交流の中心となっている。台湾第二の都市高雄は南部に位置する。

学校交流

近年、日本との学校間交流が盛んになり、姉妹校提携校も増加している。姉妹校訪問や修学旅行で台湾の学校を訪問し、授業や部活動に参加することで相互理解や相互交流が深まる中、台湾の学校も地元産業と連携して農場や台湾料理の体験型プログラムを整備するなど受

入れ体制の向上に努めている。台湾での日本人気は根強く、台湾からの修学旅行先としても最も人気がある。台湾各地にある数百を超える学校が国際交流に関心を示している。

受入れ校の一例 (出典:台湾観光局)

北部

台北市立第1女子高級中学 http://www.fg.tp.edu.tw/	人材育成に力を入れ教育
台北市立成功高級中学 http://saturn.cksh.tp.edu.tw/	進学率が高く、優秀な人材を排出
台北市立建国高級中学 http://web.ck.tp.edu.tw/	世界数理オリンピックで活躍
国立台湾師範大学附属高級中学 http://www.hs.ntnu.edu.tw/	広大な敷地面積を誇る
台北市立大安高級工業職業学校 http://www.taivs.tp.edu.tw/	基礎技能、応用力をのばす教育

南部

国立嘉義女子高級中学 http://www.cygs.cy.edu.tw/	数理と舞蹈に秀でた人材を育成
国立嘉義高級商業職業学校 http://www.cyvs.cy.edu.tw/	生活指導を重視
国立台南第一高級中学 http://www.tnfs.tn.edu.tw/	率先して国際交流を推進
国立台南第二高級中学 http://www.tnssh.tn.edu.tw/	地球科学、IT教育が充実

中部

国立台中文華高級中学 http://www.whsh.tc.edu.tw/	IT教育とスポーツに力を入れる
国立台中第二高級中学 http://www.tcssh.tc.edu.tw/	音楽・理系科目・クラブ活動を重視
国立台中女子高級中学 http://campus.tcgs.tc.edu.tw/	理数系コースを設け、ブラスバンド部も有名
国立台中高級農業職業学校 http://www.tcavs.tc.edu.tw/	台湾最大の敷地面積を誇る職業学校
国立南投高級中学 http://www.ntsh.ntct.edu.tw/	純朴な気質の総合高校

東部

国立花蓮高級中学 http://www.hlhs.hlc.edu.tw/	人材教育と科学教育を实践
国立花蓮高級商業職業学校 http://www.hlbh.hlc.edu.tw/	技能試験と進学実績に高い評価
国立花蓮高級工業職業学校 http://bcc.hlis.hlc.edu.tw/	基礎工業の人材を育成
国立台東高級中学 http://www.hlhs.hlc.edu.tw/	広々とした美しいキャンパス

交流事例



言葉の壁を超える工業技術実習による交流

🇯🇵 宮島工業高等学校 (広島県／公立)
 🇹🇼 内湖高級工業職業学校 (台湾／台北市)

参加人数 10名(訪問時)／31名(受入れ時)

概算費用 約8万円(訪問時:同窓会、PTAの補助金を含む負担額)

交流開始のきっかけ・経緯

広島県教育委員会が平成23年度から推進する「全ての県立学校が海外の学校と姉妹校を結ぶ」という海外交流推進事業に則り姉妹校提携に至った。

主な内容

3年前から相互交流がスタートし、姉妹校訪問(12月に3泊4日)と姉妹校生徒の来校(2月)を開催

送り出し: 生徒同士の中国語や英語での交流会や、体験授業が行われた。現地大学生のガイドによる台北市内研修も実施

受入れ: 笛や太鼓での歓迎会の後、グループに分かれて機械科、電気科など全科での体験交流を実施。広島名物お好み焼きの昼食後、学生有志でスポーツに興じ、午後は宮島観光で交流を図った。

効果

台湾を訪問した学生は初の海外という者がほとんどで、帰国後

は視野が広がった。受入れ時は、日本語中心だったため意思疎通が難しかったが、共に学ぶ工業系の実習を通じてコミュニケーションを図ることができ、言葉の壁を越える交流となった。

今後に向けて

- 金銭的な問題が一番の課題となっている。同窓会やPTAからの援助もいつまで続くか不透明。受入れはお金が掛からないからその点はクリアできる。
- 言葉の問題。訪問前に中国語を数回学習したが不十分だった。また、英語での意思疎通も困難であった。



各学科実習体験／インテリア科



宮島観光

交流事例



生徒主体の交流と教員の協力体制が成功の鍵

🇯🇵 松戸国際高等学校 (千葉県／公立)
 🇹🇼 国立高雄師範大学附属高級中學 (高校) (台湾／高雄市)

参加人数 39名(訪問校生徒)

概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

千葉県の関係部局からの依頼による。

主な内容

受入れ型の交流。1年生362人とともに英語・芸術・家庭科などの授業を体験し、部活動にも参加。生徒同士が直接交流する時間が長かったため、より交流が深まった。

効果

同世代の海外の人と接することで、その国に対する理解が深まった。共通言語が英語なので英語を更に学ぼうという動機づけになった。

発展例

今年度「JENESYS2.0」で中国高校生を受け入れ、ランチ交流の後、一年生9クラスを4クラスと5クラスに分け、体育館で小グループの交流を行った。生徒同士の直接交流が成功の要因であった。

今後に向けて

校内での仕事の分担。本校には国際部があるが、他の先生方の協力も必要

その他、助言など

- 校内での協力体制を構築しておくこと。
- 交流の意義を様々な場面で共有すること。
- 生徒同士が直接交流する時間をできるだけ長く設定するとよい。



歓迎会では訪問校生徒がギターと歌を披露

07

Malaysia

マレーシア



交流上の特徴

- マレー系、中国系、インド系と多様性を持つ国との交流で異文化を強く感じる。
- 親日的で日本への関心が強く、ポップカルチャー等を通じての会話が成立しやすい。
- 小学1年時から英語は必修科目。コミュニケーションツールとして英語を使いこなす。
- 多言語を使いこなす同年代の生徒に触れ、アジア人として刺激になる。



基本情報

マレーシアは、マレー系（イスラム教徒）、中国系（仏教・道教）、インド系（ヒンズー教）等の異なる民族・宗教で国家が構成されており、アジアの縮図とも言える多様性を持った国である。英語を母国語とはしていないが、初等教育（小学校）1学年から英語を必修としており生徒の英語力は総じて高い。日本語やアラビア語、フランス

語、ドイツ語などの外国語は選択科目として中等学校で学ぶ。義務教育制度は採用していないものの中等教育まで無償であり、対象者の97%が就学している。公立校が大多数であり、英語や中国語を教授用語とする私立校の比率は低い。

教育制度

学年制度

マレーシアでは初等教育6年、中等教育が5年（前期3年、後期2年）、大学予備教育1年～2年の制度を採用(国立大学の場合)。大学の3年を加え、「6-3-2-2-3制」となっている。

● 初等教育

初等教育（日本の小学校に相当）は、7歳～12歳の6年間であり、この期間をStandard1～Standard6と呼ぶ。Standard6課程の終了試験（UPSR）を受け、基準点を満たすことで卒業資格を得る（基準点未満の場合は、さらに1年間別の移行学習を受ける。）。当該試験では、マレー系のエリートを養成する全寮制中等学校の入学者が選抜されており、中等学校入学試験としての役割も担っている(注：Standard3課程修了時試験の成績次第で飛び級することも可能)。

● 中等教育

中等教育は13～17歳の5年間。この期間はForm1～Form5と呼ぶ。3年目のForm3で試験（PMR）を受け、その結果で自分が文系か理系かに進むかが決まる。Form5課程が終了すると卒業試験（SPM）を受け、成績を大学進学の際に提出する。

● 大学予備教育

マレーシアにはForm6と呼ばれる大学入学のための準備期間があり、Lower6とUpper6の2段階に分かれる。初めにLower6（6か月間）で大学入学のために必要な基礎知識を身に付け、その後Upper6（1年間）で大学入学のための勉強を行う。Form6の終了時に全国統一試験（STPM）が行われ、この成績によって入学できる大学群が決る。

マレーシアの学年制度

学齢 年齢	スタンダード						移行学習	フォーム						大学			
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	5	6	6	1	2	3
7	8	9	10	11	12		13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
初等教育							中等教育						L6	U6	高等教育		
							下級中等教育			上級中等教育			大学予科				

学期編成

2学期制が基本的であり、期間は概ね次のように区分されている。

1 学期：1 月初旬から 5 月下旬

（途中、3 月中旬1週間及び 5 月下旬から 2 週間程の休みあり）

2 学期：6 月中旬から 1 1 月中旬

（途中、8 月下旬の1週間及び 1 1 月下旬から 5 週間程の休みあり）



クアラルンプール



マラッカ

交流事例



多民族国家のマレーシアで村落ステイやJICA・
現地日系工場などを視察

🇯🇵 東京都市大学附属中学校・高等学校(東京都/私立)
🇲🇾 SMJK Hwa Lian校(マレーシア/メンタカブ)

参加人数 約20~30名
概算費用 約25万円

交流開始のきっかけ・経緯

民間エージェントの手配で2015年から研修を開始。2015年夏に日本からの送り出し、秋にHwa Lian校の生徒の受入れを行い、姉妹校提携に至る。

主な内容

送り出し: 中学3年生を対象とし、夏休み期間中に10日間の異文化体験プログラムを実施。多民族国家であるマレーシアで、それぞれの文化、宗教、生活様式を尊重しながら、国際理解教育のキーワードである「共生」を肌で感じるのが目的。テメルロー村でのホームステイを活動の中心とし、伝統的なゲーム交流、ゴム園や果樹園見学、マレー料理体験など、英語を母語としないアジアの人たちと英語を使ってコミュニケーションを取る。また、現地受け入れ校にて体験授業(普通科目は英語、実技科目はマレー語)を行い、現地の生徒との交流も盛り込んでいる。その他の活動として、クアラルンプール市内の博物館やヒンドゥー教の聖地、バツー洞窟の見学、マレーシアJICAや日系企業への訪問も行う。

受入れ: 日本から夏の短期研修で訪問後、Hwa Lian校の生徒10名と引率教員が来校。歓迎セレモニーや校内見学、姉妹校提携の調印式などを行った。校内見学では英語や音楽の授業に参加し、生徒間で親睦を深めた。

効果

- 英語学習に対する取り組み方が積極的になった。
- 異文化に対する理解が深まった。
- 日本を見つめ直す機会となった。

効果測定

参加者へのアンケートを実施

実施スケジュール例

1日目	成田空港ークアラルンプール着
2日目	クアラルンプール市内研修(王宮・国家記念碑・国立博物館) バツー洞窟見学、テメルロー村集会場にて歓迎式、ホストファミリーと対面式
3日目~7日目	Hwa Lian校での体験授業 (英語・数学・科学は英語、美術・音楽・体育はマレー語) 滞在中は、ゴム園・果樹園・工芸品造り見学やマレー料理体験、川釣りなど
8日目	離村式 FRIM(マレーシア森林研究所)体験研修 買い物・食事など
9日目	マレーシアJICA・日系企業への訪問 民芸品店・食事など クアラルンプール空港へ
10日目	成田空港着 到着後、解散



Hwa Lian校訪問の様子

08

Republic of Korea

韓国



交流上の特徴

- 時差がなく、2時間で行ける抜群のアクセス
- 安全性が高く、教育旅行の受け入れ態勢が整備されている。
- 姉妹都市提携は163件超と日本との関わりが深い。
- 日本語学習者数55万人6千人(※1)は世界3位(※1「JAPAN FOUNDATION」2015年度調査)



基本情報

初等学校のほとんどが公立で、中学校、高等学校の公立と私立の比率はそれぞれ3:1、6:5となっている。高校進学率はほぼ100%。大学進学率も71% (2015年) と日本以上に受験競争が激しいと言われる。日本語が高等学校、中学校に第2外国語として導入されて以来、日本語選択率は第1位を保持する。

韓国への修学旅行は近くて安全、さらに低コストで実施できるため、

1972年の私立高校での実施を皮切りに増加し、2011年度は157校1万8千人が訪韓、2012年には中学・高校の修学旅行先として第1位となる。(※2) 姉妹都市提携は現在163件を超えており、姉妹校提携も1997年には既に97件 (5中学校を含む) となっている。(※3)

※2 教育旅行年報2012(日本修学旅行協会)
 ※3 財団法人自治体交際化協会(ソウル事務所)

教育制度

学年制度

韓国は日本と同じ6-3-3-4制の学校制度。1年から6年までが初等学校(小学校)、7年から9年が中学校、10年から12年が高等学校となる。なお、義務教育は小・中学校の6歳から15歳までの9年間となる。

学期編成

韓国は2学期制。1学期は3月1日から7月、2学期は8月下旬から2月末となっている。(※4)

※4 外務省

韓国の学年制度

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
年齢	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
学校	初等教育(小学校)						中学校			高等学校			大学			

← 義務教育 (1歳から15歳まで) →

韓国の小・中学校の学期制度の例

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月下旬	9月	10月	11月	12月
2学期		1学期 3月1日から7月まで					2学期 8月下旬から2月末日				

韓国教育旅行のメリット

- 韓国は日本に一番近い外国。移動時間が短いため、現地滞在時間をより長く確保できる。安全性が高く、費用を抑えられることも特徴
- 修学旅行の受け入れ体制も整備されており、大勢が宿泊できる施設も多く、多彩なオプションが提供される。現地校訪問やホームステイなどの交流プログラム、朝鮮半島の歴史学習に最適な世界文化遺産の「百済歴史遺跡地区」訪問、キムチ作りや韓服着用などの体験学習施設は全国に設置されている。南北が分断される北緯38度線を見学すれば平和の大切さも実感できる。その他にも大陸を感じる自然学習やエンターテインメント、産業観光などニーズに合わせたアレンジが可能



交流開始の窓口

韓国観光公社が教育旅行・姉妹校提携について様々な支援を提供しており、問合せ窓口となっている。主な内容は、教育旅行セミナー・説明会の実施、学校間の姉妹校交流提携への協力、教育旅行実施

予定校説明会への協力、教育旅行マニュアルなどの関連資料提供など多岐にわたる。

交流事例



相互交流で感動の再会を体験

🇯🇵 開智中学校・高等学校 (和歌山県／私立)
🇰🇷 釜山鎮女子高等学校・養精高等学校 (韓国／釜山市)

参加人数 送り出し時:33名
 受入れ時:61名
概算費用 4.95万円(送り出し時)

交流開始のきっかけ・経緯

以前から姉妹校だった2校と平成16年から正式に交流開始

主な内容

高校1、2年生が対象。5月に2泊3日で姉妹校を訪問し、翌年2月には姉妹校生徒が来校して感動の再会を果たす。文化交流を主体とした相互交流を隔年で実施

送り出し:サムルノリ演奏やチマチョゴリ体験、姉妹校生徒との慶州歴史遺産地区研修、釜山市の班別自主研修を実施

受入れ:プレゼント交換、授業・校内見学、音楽部・アカペラ部の発表による文化交流、ユニバーサルスタジオジャパンでのグループ別の自主研修を実施

効果

- 英語でお互いの学校を説明するため、語学の必要性を肌で感じることができる。

- 異文化体験をすることによって日本の良さを改めて知ることができる。

効果測定

参加者へのアンケートを実施。英検やGTECを受験

今後に向けて

英語の語学力が課題。読み書きだけに偏ることなく“話す”中心の指導に。



一番楽しみにしていたチマチョゴリ体験



プレゼント交換

交流事例



6日間互いの家庭にホームステイし、授業体験

🇯🇵 札幌静修高等学校 (北海道／私立)
🇰🇷 全州權映女子高等学校 (韓国／全州市)

参加人数 送り出し、受け入れ時:5~9名
概算費用 7万円(送り出し時)

交流開始のきっかけ・経緯

札幌市国際部から学校の紹介を受けた。

主な内容

2月に姉妹校生徒が来日、8~9月に生徒が訪韓して6日間お互いの生徒の家庭にホームステイしながら登校する。授業、部活動、調理体験などを通じて文化交流を図る。

効果

外国人に対して、積極的に交流しようとする意欲が高まる。共通言語は英語になるが、「相手に伝わればよい」という気持ちで日本語を交えながらも留学生と交流するようになる。

効果測定

送り出し:毎日、出来事を日記に記入させ、帰国後、内容をまとめて提出させ、『報告集』という形でまとめる。

受入れ:ホストファミリーを引き受けてくれた生徒に感想を記入させ、その感想を国際交流だよりやHPなどで積極的にアピールする。

今後に向けて

留学担当教員の負担が多い。本校ではほぼ毎月国際交流の機会を生徒に提供しよう努力しているが、事前の打合せや生徒への事前・事後指導、学校内外部へのPR等を含めると、負担をしてもかなりの負担になる。負担をなるべく減らすためのシステム構築が重要になる。



パートナークラスで授業体験



日本の伝統楽器の琴体験

交流事例



交流校におけるドイツ語での授業参加や
日本文化の紹介を通して、相互理解を深める

🇯🇵 啓明学園中学校高等学校 (東京都 / 私立)
🇩🇪 Gustav-Heinemann-Obershule (ドイツ / 公立)

参加人数 希望者 5~10名
概算費用 35万円

交流開始のきっかけ・経緯

ベルリン日独センター、文部科学省を通して2007年からドイツのGustav-Heinemann-Obershuleとの交流を開始

*ベルリン日独センター：学術・文化分野における日独間及び国際的な協力を支援し深めることを目的とし1985年に設立。会議関連事業、文化事業、日本語講座、日独人的交流プログラム、日本に関する情報提供、出版等の事業を通じて、日独関係を促進し、強化することを目的とした日独両国による国際機関

主な内容

- 1 ドイツ語での授業参加：数学などドイツ語で行われる授業に参加。生徒は出発前に事前学習を行い、ドイツ体験学習に参加。ドイツ語に精通した卒業生から、挨拶等の初級ドイツ語を日本で学び、出発に備える。
- 2 ホームステイ滞在：ホームステイ先はドイツ語と英語両方を話せる家庭や生徒が多く、



ベルリン市内観光の写真

比較的抵抗なくドイツ語の生活や授業になじむことができる。

- 3 交流校の生徒へ日本文化の紹介：日本料理、着物、日本歌謡、日本舞踊など
- 4 日本から生徒がドイツへ行くドイツ体験学習のほかに、Gustav-Heinemann-Obershuleからの留学生が、啓明学園の生徒宅でホームステイをしながら授業に参加、書道や餅つきなどを体験する受入れも行っている。

効果

- 英語やドイツ語を実際に使う機会が増える。
- 日本文化を現地で紹介するため、日本に関して学びを深めることができる。
- 自分自身を知る機会となる。
- 学校行事の際に、来日していた交流校の生徒がドイツに関して発表し、全校生徒がドイツについて理解を深めることができた。

交流事例



フィンランドからの留学生と
部活動を通じた交流

🇯🇵 能代松陽高等学校 (秋田県 / 公立)
🇫🇮 Arkadian Yhteislyseo (フィンランド)

参加人数 1名 概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

YFU (TOUYH FOR UNDERSTANDING) から、本校校長に要請があった。

主な内容

国際コミュニケーション学科2年生と一緒に通常の授業を受けた。また、部活動にも参加し、野球部のマネージャーとして頑張った。

効果

外国人生徒が学校にいることに対する抵抗がなくなった。

今後に向けて

長期で受け入れる場合は、短期の留学生よりも特別な交流は少ないので、どのように交流を活性化するか検討

交流事例



ベトナムで日本語を学ぶ
生徒との交流を通じ、途上国の
経済成長と課題を学ぶ

🇯🇵 昭和女子大学附属昭和高等学校 (東京都 / 私立)
🇻🇳 さくら日本学校 (ベトナム / ホーチミン市)

参加人数 39名 概算費用 約20万円

交流開始のきっかけ・経緯

高校1年生全員が参加する選択制研修旅行のプログラムの一つとして企画

主な内容

現地校を訪問して相互文化交流とディスカッションを行う。

効果

- 日本語を学習している生徒と交流することで、ベトナムでの日本企業やODAなどの役割や関わりを認識するきっかけとなった。
- 同世代の交流によって、ベトナムの経済成長や課題を学び、途上国への支援や製品開発を目指した進路を選択する生徒が出てきた。
- グローバルな意識を持つきっかけとすることができた。

交流事例

ロシア語履修の特徴を
いかした交流

🇯🇵 能代松陽高等学校 (秋田県／公立)
🇷🇺 Vladivostok School No.51
(ロシア／ウラジオストク)

参加人数 6名 概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

秋田県とロシア沿岸地域との間で交流をするようになり、当時ロシア語を履修できる学校が本校だけだった。

主な内容

プレゼンテーションによるお互いの文化、地域、学校紹介。近隣施設でスポーツやものづくり（ストラップ）を一緒に行う。部活動（書道・茶道・美術）に参加して、一緒に活動。火力発電所など市内の施設を一緒に見学。ホストファミリーとの交流

効果

交流事業に参加した生徒が在校生に対してプレゼンテーションを行ったり、地元紙の記事の中で体験談を話したりして、交流の内容や文化の違いについて学んだことを多くの生徒や住民に知らせることができた。

交流事例

イギリス+UAEを一度に訪問
多文化理解を促進

🇯🇵 富士見丘中学高等学校 (東京都／私立)
🇬🇧 Westonbirt校、St.Edward校 (イギリス)
🇦🇪 UAE大学 (UAE)

参加人数 27名 概算費用 約60万円

交流開始のきっかけ・経緯

以前勤務していた外国人教員の紹介、及び旅行会社からの紹介

主な内容

イギリス・チェルトナムにて、姉妹校であるWestonbirt校とSt. Edward校を訪問。体験授業や日本文化を紹介。同市にて生徒一人ずつホームステイ

アラブ首長国連邦 (UAE) では、UAE大学を訪問。同校の学生とアルアインを観光。他に、ドバイ、アブダビを訪問

効果

英語学習のモチベーションアップの他、留学先にUAEを加えたことで、異文化を捉える視点が高まった。

交流事例

村落体験で
イスラム教文化を体験

🇯🇵 昭和女子大学附属昭和高等学校 (東京都／私立)
🇸🇬 Westwood Secondary School
シンガポール国立大学 (シンガポール)

参加人数 27名 概算費用 約20万円

交流開始のきっかけ・経緯

以前勤務していた外国人教員の紹介、及び旅行会社からの紹介

主な内容

双方の生徒が学校生活の様子をプレゼン。ゲーム・工作等の交流。半日カンポンビジット(村落体験)でイスラム教の文化・生活を体験

効果

英語学習へのモチベーションが高まった。

効果測定

帰国後にアンケートを実施

交流事例

スウェーデンより
高校体験の受入れ

🇯🇵 東京農業大学第一高等学校 (東京都／私立校)
🇸🇪 トンバ高校 (スウェーデン)

参加人数 1～2名 概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

スウェーデン トンバ高校の日本での文化・高校体験プロジェクトの受入れ先の1校として仲介機関からの紹介があり、受入れを開始した。

主な内容

受入れ日数は7日間。学校では通常行われている授業に参加させるほか、書道や柔道等などの日本文化を体験する機会を提供している。ホームステイ先は在籍する生徒の家庭から募集、選考と決定は学校が行い、一般家庭でのホームステイも体験できる。

効果

外国語、外国文化に対する関心が高くなり、外国及び自国の文化の学習に役立っている。

III 交流の種類

III

交流の種類 ■ 文化を通じた交流

1 文化を通じた交流

伝統文化である茶道、書道、舞踊などに加え、漫画、アニメ、映画、ゲーム、ポピュラー音楽、テレビ番組といったポップカルチャーは、等身大の現代日本を伝えるものとして訴求力が高く、相手国からは相互交流の際に体験してみたいものとして注目されている。相手国生徒の関心の高さから生徒同士の会話が成立しやすい。加えて、自国を見直す契機にもなる。

主な交流方法としては、下記が挙げられる。

- | | |
|------|--|
| 送り出し | 1 海外で行われる大会、発表会へ参加する。
2 個人で留学する際に、現地で披露する。 |
| 受入れ | 1 部活動に参加してもらい、レクチャーする。
2 伝統文化を体験できる場と一緒に訪問する。 |

交流にあたっての注意点

- 交流前に、紹介する文化の背景などについて勉強しておくことで、会話が広がる。
- ただの「体験」で終わらないよう、事前・事後の学習や指導が大切である。

イギリス(コッツウォルズ)7日間の例

1日目	日本→ロンドンへ移動
2日目	ロンドン市内視察研修 午後からコッツウォルズへ移動
3日目	現地学校にて、生徒同士の交流 日本の伝統文化の披露 折り紙・けん玉などのワークショップ コッツウォルズ周辺視察研修
4日目	オックスフォード大学視察訪問 歴史的建築物や映画ロケ地の視察訪問
5日目	ホストファミリーと終日行動
6日目	ロンドンへ移動後、現地出発
7日目	日本着

※受入れのスケジュール例はP61を参照



語学研修に加えてスコーン作りやアフタヌーンティー体験などイギリス伝統文化に触れる

🇯🇵 晃華学園中学校・高等学校(東京都/私立)
🇬🇧 イギリス/チェルトナム市(イギリス/チェルトナム市)

参加人数 希望者65名

概算費用 55万円

交流開始のきっかけ・経緯

1976年の第1回英国語学研修以来、希望者による海外研修を毎年行っている。

主な内容

- 1 高校1年生の希望者を対象
- 2 会話力の向上を重視した英語研修に参加
- 3 スコーン作りやマナーハウスでのアフタヌーンティー体験、オプションで乗馬のアクティビティなど、イギリスの伝統や文化に触れながら、語学だけでなく文化や歴史に関しても学ぶ。

効果



- 自ら英語を話そうという意欲の向上が見られた。
- 事前学習としてイギリスの歴史・文化について大学の講師からレクチャーを受講し、個別に興味のあることについて調べることで、現地で更なる感動や知識の強化が見受けられた。

効果測定

参加生徒による振り返り



アメリカの指定校での1学年間の認定留学で確実な英語力の養成と、進路の選択肢の拡大を目指す

 実践学園中学・高等学校(東京都/私立)
 Juan Diego Catholic High School (アメリカ/ユタ州) 他3校

参加人数 希望者4名(28年度)

概算費用 約450万円

交流開始のきっかけ・経緯

留学エージェントの紹介による現地高校を視察後、学習・生活環境の面で留学に適しているアメリカの高校4校を指定校とした。

主な内容

高校1年次に希望者を募集、英語力その他の選考試験を経て留学を認定する。留学期間は高校2年次1学期終了後から翌年1学期終了まで。留学する生徒は留学前に校内で行われる留学対策講座を受講

さらに、参加者の英語力に応じて事前語学研修を現地の語学学校にて受講する。留学校での1学年間の必修科目と選択科目を履修し、取得した単位は日本の高校の単位に換算、通常は高校3年次の2学期から復学する。また、現地校、本校双方認める場合に限り、現地校での2年目の留学も可とし、日米両方の高校卒業資格の獲得も可能となる。本制度利用者の進路は国内大学一般受験のほか、国内大学帰国子女入試、海外大学進学などが挙げられる。

効果

1学年間留学することによる大幅な語学力の向上が見られる。人間性においては積極性と自立心の向上が顕著で、復学した際、全体の活性化につながっている。親子ともに早期から進路を意識して留学するため、進学に向けた意欲も向上しており、受験に備えた学習にも前向きに取り組む傾向がある。

効果測定

留学后面談での参加者及び保護者所感、留学前後レポート



留学先高校授業の様子(アメリカ)

実施スケジュール例

留学前3月頃	認定留学選考審査
留学前4~7月	留学対策講座受講(校内) 留学手続期間
留学前7~8月	事前語学研修(アメリカ)任意参加*
9月頃	留学開始* 定期レポート必須
6月頃	留学終了
7~8月	夏期休暇/教科補講(必要に応じて)
9月1日	第2学期から復学



アメリカ指定校(ユタ州)の1校



1ターム(3ヶ月)の長期留学で英語力のみならず、優れた国際感覚を養う



京華女子中学校・高等学校(東京都/私立)



ニュージーランド国内5校 (Avonside Girls' High School / St. Dominic's College / Whangarei Girls' High School / New Plymouth Girls' High School / Sacred Heart College)

参加人数 12名

概算費用 130万円

交流開始のきっかけ・経緯

民間留学エージェントからの紹介

主な内容

高校1、2年生を対象とし、ニュージーランドの公私立校へ1ターム(3ヶ月)留学生として派遣している。留学期間中は、現地で行われている正規の授業にも参加。現地の高校生活を実体験することで、英語力を伸ばすだけでなく、異なる価値観を理解し自立心を養うことが目的。また、寮・ホームステイ滞在中で、生きた英語を学び、広くニュージーランドの歴史や文化に親しんでいる。

効果

- 留学が動機付けとなり、英語学習への意欲が向上した。
- 異文化の中で長期間生活することにより、自立心と他者への寛容さを養うことができている。

効果測定

- 留学前と留学後に英語力を測定する試験を実施
- 帰国後の報告書提出と体験レポートのプレゼンテーションを実施

調整テーマ

- 派遣生の選出
- 学校行事との兼ね合い
- 日本での学業の遅れ



イギリスの伝統を誇るパブリックスクールで体験する語学研修や文化交流



足立学園中学校・高等学校(東京都/私立)



Rugby School (イギリス/ラグビー)

参加人数 25名

概算費用 70万円

交流開始のきっかけ・経緯

本校の語学研修は1998年からイギリスウェールズ地方にあるChrusr's Collegeで始まり、現在ではRugby Schoolで行っている。

主な内容

中学3年生、高校1年生、高校2年生から希望者を募り、サマースクールへの参加を実施している。イギリスの文化や歴史に触れるとともに、少人数の語学研修やスポーツ、交流会を通じてコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上を目指し、グローバルな人材育成を目的としている。

実施スケジュール例

1日目	日本出発、ヒースロー空港到着、ラグビー校に到着、英語力診断テスト
2日目	午前:授業、午後:ウォリック城見学 ラグビーへ戻る、アクティビティ

3日目	午前:授業、午後:授業、アクティビティ、 インターナショナルナイト(国際交流会)
4日目	オックスフォードへ移動、オックスフォードにて カレッジの見学、スポーツ大会
5日目~ 7日目	午前:授業、午後:アクティビティ
8日目	ストラトフォード・アポン・エイボンへ出発 シェイクスピアの生家見学、ラグビーへ戻る ハウス・アクティビティ
9日目	午前:授業、午後:アクティビティ
10日目	ロンドンへ出発、大英博物館見学、ラグビーへ戻る、ハウス・アクティビティ
11日目	バーミンガムへ出発、水族館見学、ラグビーへ戻る
12日目	午前:授業、午後:アクティビティ
13日目	午前:トリニティ英語検定試験、午後:アクティビティ、 修了証授与式、フェアウェル・パーティー
14日目	ラグビー校出発 ヒースロー空港へ
15日目	日本着



21日間ホームステイして、姉妹校で語学研修 日本文化も紹介

🇯🇵 札幌静修高等学校(北海道／私立)
🇨🇦 The High School at Vancouver Island University
(カナダ／ブリティッシュ・コロンビア州)

参加人数 10名
概算費用 40万円

交流開始のきっかけ・経緯

教員による現地視察を経て、姉妹校提携を結んだ。

主な内容

ユニバーサル科生徒の半数(約10名程度)が、姉妹校にて3週間語学研修を行う。研修内容は現地での授業参加とホームステイ

効果

海外を経験したことで、英語に対して物おじすることがなくなった生徒が多い。また、英語や進学を目指した学習への意欲が高まった生徒もいた。

効果測定

参加者へのアンケートを実施

成功事例

現地での研修中に『日本文化体験』を実施し、相手校生徒に日本の文化(お茶・けん玉・あやとり・折り紙など)を英語で紹介する。英語のスピーチとは異なり、体験活動を交えたコミュニケーションなので、英語が苦手だという生徒も身振り手振りを交えて積極的に説明できた。

実施初年度は、生徒も何をしてよいのか分からず黙ってしまふことも多かった。そのため、事前指導の回数を増やし、生徒たちに何を紹介するのかを全て考えさせたり、前年度研修に行った先輩たちにリハーサルを見せアドバイスをもらったりすることで、以前の生徒たちよりも自信を持つことができたことが成功につながったのではないかなと思う。

課題

国際交流活動はただ交流するだけであれば簡単だが、そこに教育的効果を求めるのであれば、事前・事後指導は大変重要であると思う。事前指導として、研修中に何を学ぶのかを具体的にイメージさせること、授業内の活動でライティング・スピーキング活動を増やし自分の意思を表現できる力を身に付けさせることなど、事後指導として、研修を通して何を学んだのかを英語で発表する機会を作る(プレゼンテーション発表など)。

今後

次年度(2017年度)から、英語の力が飛躍的に伸びる3か月間の留学に近づけたいという意図から、期間を延長して10週間(2ヵ月半)オーストラリア・カナダのいずれかへ留学する。生徒負担費用は60万円で、費用がオーバーした分は学校で負担することになる。

実施スケジュール例

1日目	新千歳空港～バンクーバー ホストファミリーとの対面
2日目	オリエンテーション、学校見学
3～4日目	ホストファミリーと過ごす
5～7日目	午前:語学研修 午後:日本文化紹介、市内観光、調理実習・交流
8日目	バンクーバー島・ビクトリア観光
9日目	午前:語学研修 午後:日本文化紹介(小学校にて)
10～11日目	ホストファミリーと過ごす
12～14日目	午前:語学研修 午後:シュウメイナス観光、映画鑑賞、ボウリング
15日目	キャンドラルグローブ・クームス見学
16日目	午前:語学研修・お別れ会 午後:アイススケート
17～18日目	ホストファミリーと過ごす
19日目	ホストファミリーとお別れ バンクーバー市内観光
20～21日目	バンクーバー～新千歳空港



一生涯準備してきた日本文化を英語で紹介



高さ76mもある樹齢800年の樹「Douglas-fur」で記念撮影



元気のいい子供たちの英語を聞き取るのにも一苦労



相互交流から発展した 代表生徒同士の交換派遣プログラム

開智中学校・高等学校(和歌山県／私立)
 Dartford Grammar School(イギリス／ダートフォード)

参加人数 送り出し、受入れ時:各1名

概算費用 フライト代のみ。生活費は双方のホストファミリーが負担する。

交流開始のきっかけ・経緯

グローバル教育の一環として長年交流のあるイギリスの交流校Dartford Grammar Schoolとお互いの代表生徒1名を約1か月間交換派遣するプログラムを2014年からスタート

主な内容

代表生徒がお互いの家庭にホームステイをして一般生徒と同じ授業・部活動に参加する。高校2年の英検準一級程度の語学力を持つ生徒が対象で、学費は免除される。毎年、5月に交流校生徒が来日、11月に生徒が訪英する。

送り出し: イギリス現代文学、イギリス古典文学、日本語、フランス語、数学、科学などの授業に参加する。

受入れ: 剣道、書道、茶道、囲碁・将棋などの部活動に参加して、日本文化を体験。生徒会役員との活動や、ECSクラ

ブにて文化の違いについてディスカッション

効果

同世代の学生との交流を通じて異文化を知り、自分自身や自国の文化を相対化して理解を深めることができる。



校長先生と両校の代表生徒



寮での生活で、日本とは
違う文化を体験

新潟明訓中学校・高等学校(新潟県／私立)
 Kaplan International School in Boston(アメリカ／マサチューセッツ州)

参加人数 33名 **概算費用** 46万円

交流開始のきっかけ・経緯

グローバル教育を推進するプロジェクトの一つとして実施

主な内容

寮生活をしながら語学学校での研修を中心に生活し、ボストンで起業している日本人実業家の講演、MITの日本人大学院生との懇親会、ハーバード大学での日本人留学生との懇親会など、普段なかなか味わうことができない体験の機会となった。

効果

物事を自分の目で見て考え、積極的に情報発信して行動するという意識変革がなされ、学校行事などでのリーダー的な活躍がみられた。



南オーストラリア州立学校の
プログラムに参加

京都府教育委員会(京都府)
 South Australian Government School
(オーストラリア／南オーストラリア州)

参加人数 40名 **概算費用** 40万円 (そのうち20万までは府が補助)

交流開始のきっかけ・経緯

駐日事務所や在大阪総領事館の支援体制が強力で事業を進めやすかったため。

主な内容

南オーストラリア州立学校で行われるプログラムに参加する。また、ホームステイ、遠足、現地大学訪問を通して異文化を理解する。

効果

毎年一定数の生徒を派遣することで留学生の増加につながる。校内プレゼンテーション等による他生徒への波及効果がある。異文化交流により日本文化や京都の文化を再認識する機会となる。



現地小学校との文化交流も併せた 語学研修を通して、将来を考える機会に

城北学園 城北中学校・高等学校(東京都/私立)
 Curtin University(オーストラリア/西オーストラリア州)
 (平成29年度から研修地及び大学が変更になります。)

参加人数 希望者70名(28年度)

概算費用 56万円

交流開始のきっかけ・経緯

旅行会社の案内及び教員による現地視察を経て実施

主な内容

- 1 高校1年生及び中学3年生がオーストラリア・パース市で15日間の語学研修を行う。
- 2 午前中に語学研修、午後に企業や小学校を訪問し、現地小学生に福笑いなどの日本文化を教えるなど文化交流を図る。

効果

- 生徒が外向き志向になる。
- 文化の多様性について理解が深まる。

効果測定

事後研修とアンケートの実施及び感想文の提出による。

実施スケジュール例 *Curtin Universityで語学研修

1日目	成田空港からシンガポール経由、パースへ移動
2日目	市内観光 Curtin University到着 オリエンテーション
3日目~4日目	午前 Curtin Universityで語学研修(*) / 午後 市内観光
5日目	午前*/午後 The University of Western Australia訪問
6日目	終日 ロットネスト島一日ツアー
7日目	終日 ホストファミリーと交流
8日目	午前*/午後 アボリジニー文化体験
9日目	午前*/午後 現地小学校訪問
10日目	午前*/午後 スポーツアクティビティ体験
11日目	午前*/午後 現地企業訪問
12日目	午前 Curtin University修了証書贈呈式 / 午後 市内リサーチプロジェクト
13日目	終日 ホストファミリーと交流
14日目	午前 フリーマントル観光 パース空港発シンガポール経由
15日目	成田空港着



現地高校生と触れ合いながら、実用的な英語力と コミュニケーション能力の向上を目指す

城北埼玉高等学校(埼玉県/私立)
 Hills College(オーストラリア/クイーンズランド州)

参加人数 希望者24名(28年度)

概算費用 38.2万円

交流開始のきっかけ・経緯

旅行会社の紹介で、平成28年度から研修先を時差の少ないオーストラリアへ変更し実施

主な内容

中学3年生から高校2年生までの希望者が参加。クイーンズランド州Hills Collegeにて実用的な会話を中心とした英語力向上を図りながらオーストラリアの歴史、文化、伝統を学ぶ。

- 1 平日4日間は英語レッスン(ESL資格を持った教師が指導)と授業参加が組み込まれている。現地高校生とともに行動し、サポートを受けながら授業参加
- 2 週末は国立公園やゴールドコースト・ブリスベンなど周辺地域を観光

効果

英語に関する興味と英語使用に対する積極性が高まった。

効果測定

発表会を実施



現地の子供に折り紙を教える生徒たち



ランチの様子

2 スポーツによる交流

2020年の東京オリンピックを控える今日では、スポーツによる交流も有効な方法であり、競技力の向上はもちろんのこと、競技を通じて海外への意識を高める絶好の機会である。

語学力が十分ではない若年層において「スポーツ」という共通の媒体があることは、言葉以外のコミュニケーションを生み、相互理解を深めることの一助になる。

主な交流方法としては、下記が挙げられる。

- 1 海外への遠征・交流試合
- 2 国内に招いての練習・交流試合
- 3 国内での大会開催、及び海外への大会参加

スポーツをメインにしなが、行程の中に文化施設への訪問などを加えることで、より一層異文化理解を深めることができる。



卓球を通じての日中交流

交流開始に当たっての窓口

- 各競技の連盟
- 国際交流委員会
- 他事業で既に交流がある場合、その担当窓口から紹介してもらう

交流に当たっての注意点

- ゼロから立ち上げるのは難しいので、既に都市間でスポーツの交流がある事例(W杯の合宿地として誘致したなど)と連動させると発展しやすい。
- 友好都市、姉妹校の窓口を通してよい。



卓球交流試合で生徒同士の交流機会を増大

🇯🇵 能代市立能代第一中学校、大仙市立大曲中学校 (秋田県／公立)
 🇨🇳 天津市第二中学校 (中国／天津市)

参加人数 12名
 期間 6日間

交流開始のきっかけ・経緯

秋田県と天津市が締結した「友好協定締結に向けた協議書」に基づき、交流を開始した。

主な内容

天津市内の学校の生徒との卓球交流試合を通して、日本と中国の言葉や文化の違いを体験することを目的としている。初日の夕方には歓迎会、翌日の夕方には交流会も行い、生徒同士の交流の機会を増やした。あわせて、天津市では古文化街・五大道など、北京市では八達嶺長城・故宮などの施設の視察も行っている。

実施スケジュール例

1日目	羽田空港から北京へ移動
2日目	北京から天津へ移動 現地生徒との交流事業(学校訪問) 交流試合、歓迎会
3日目	交流試合、交流会
4日目	天津市内文化施設視察
5日目	天津から北京へ移動、市内観光
6日目	北京から帰国



限られた時間の中で、 迫力のある柔道を体験してもらう

🇯🇵 桐生第一高等学校(群馬県/私立)
🇹🇼 國立中興大學附屬高級中學(台湾)

参加人数 32名(受入れ人数)
概算費用 6700円(1人あたり)

交流開始のきっかけ・経緯

群馬県の観光物産課からの紹介。最初に受入れの可否、受入れ可能な時期についてのアンケートに返事をしたところ、可能性のある学校について打診があり、実現した。

主な内容

最初の歓迎会で両校の出し物での交流(応援団の校歌斉唱やチアリーダー部の演技など)。校内見学、昼食交流(本校調理科のデザート提供)、本校の専門コースの授業を応用した日本文化体験交流(浴衣着付、漫画合戦、折り紙教室、柔道体験)、お別れ会で日本文化体験(本校の茶道部と製菓衛生師コースの協力で茶道体験、茶道解説)などを行う。

特に日本文化体験での柔道体験においては、本校・相手校ともに楽しい体験になっていると思う。格闘系スポーツということで、当初、参加台湾生徒は男子がほとんどだろうと予測していたが、反して女子が多かった。40分程度という時間の制約もあったが、柔道指導者の巧みな話術も助けて、終始なごやかな雰囲気だった。参加した柔道部員の中には全国大会を狙える者もあり、みな大柄だが、それらを台湾の小柄な女子が大技で投げ飛ばす(投げ飛ばされたふりをする)のは、受身の時の大きな音もあって、大変な迫力だった。全体の流れとしては、以下のとおりである。

- ① 指導者からの柔道の解説
- ② 道着の試着
- ③ 受身の体験
- ④ 組み手の体験

効果

- 未知の体験によって得られる刺激がある。
- 言語に対する興味、また、言語の枠をこえたコミュニケーションの可能性を実感する。

効果測定

県が用意した事後アンケートを利用

調整テーマ

積極的な体験メニューを用意するものの、全体を通して5時間程度の滞在では、時間的制約があり非常に厳しい。



投げ技の迫力を体感



初めて袖を通す柔道着に、笑顔がこぼれる

3 科学、ものづくりを通じた交流

先端分野の研究開発及び自動車など完成品のすり合わせ技術や、精密機器の製作技術など、日本の科学技術は広く海外に知られている。交流時の実習、あるいは課外活動を通じて、こうした分野への理解を深め合うこともできる。学校としての受入れはもちろん、民間企業と提携することで、双方にとってより実践的でメリットの大きい取組となる。

主な交流方法としては、下記が挙げられる。

- 1 実習授業に参加してもらう。
- 2 工場見学などを一緒に行く。
- 3 企業で受け入れている外国人留学生との交流を図る。
- 4 現地の大学を視察訪問する。

交流開始に当たっての窓口

- 教育委員会
- 大学の学部窓口
- 企業の広報等窓口

サンプルスケジュール(実習授業の体験)

10:00頃	迎え入れ・記念撮影
10:10~11:15	歓迎式 挨拶・記念品交換など
11:20~11:50	生徒交流会
11:50~12:30	校内見学 (施設見学含む)
12:30~13:15	昼食
13:15~13:45	演技披露
13:45~14:15	クラブ活動体験
14:15~14:30	見送り



実習を通してコミュニケーションを図る



機械・装置等施設の見学で 専門分野の共通点や相違点を認識できた

- 🇯🇵 桐生工業高等学校(群馬県/公立)
- 🇹🇼 国立臺中高級工業職業學校(台湾)

参加人数 約40名(受入れ人数)

概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

群馬大学理工学部による紹介

主な内容

歓迎セレモニーや文化の交流(ブラスバンド演奏、ダンスパフォーマンス)に加えて、工業高校の特性である機械・装置等施設の見学を一緒に行うことで、お互いの専門分野の共通点や相違点を認識する良い機会となった。

機械科: マニシングセンター、相撲ロボット、マイコンロボットの見学

電気科: 高圧実験、電気実験装置の展示

建設科: コンクリートカヌー、模型・図面(建設甲子園)

染色デザイン科: 織機、ダイレクトジャガードの見学

効果

丁寧な説明を心掛けることはもちろん、台湾の言葉で説明をしたことを好意的に受け取ってもらえ、友好的な関係を築けた。また、生徒は国際交流をしたことで国際理解が深まった。

効果測定



関係した生徒及び教員からのヒアリング



校内視察の様子



海外で専門知識が生かせることを 実感させる良い機会

 田辺工業高等学校(和歌山県／公立)
 台湾国立彰化師範大学附属高級工業職業学校(台湾)

参加人数	送り出し:10名 受入れ :30名
概算費用	送り出し:7~8万円 受入れ :0円

交流開始のきっかけ・経緯

和歌山県教育長の台湾訪問時に台湾側から交流の希望があった。教員の現地視察を経て、校長と教育委員会(指導主事)が訪台し、正式に姉妹校締結

主な内容

日本語と中国語を混ぜた生徒交流会や、お互いの文化(台湾の舞踊、茶道、日本の武道など)を紹介し合うことを通じて、相手国に対する理解を深め、より関心を持たせるようにしている。加えて、工業高校同士という特性を活かし、お互いが普段学んでいる内容(実習)を相手にも体験してもらうことで、技術的な交流という側面も持たせている。

送り出しの際には、姉妹校のOBが経営する台湾企業や工場を見学させてもらい、普段学んでいる専門的な内容が海外でも通用することを実感する良い機会となっている。

また、本校教員が、姉妹校の生徒に対して日本の文化についての授業を行い、学校同士の交流を活発に継続するよう取り組んでいる。

受入れの際には生徒同士に限らず、PTAや同窓会の保護者を交えた歓迎会を実施しており、これにより国際交流に対する保護者の理解を高め、より協力を得られやすい環境を作っている。

効果

- 工業高校の専門的な内容が海外でも通用することを感じて学習意欲の向上につながる。
- 専門知識や技能を身に付けることの重要性を再認識し、日々の学習に自信を持つようになる。
- 相手国に対する理解が高まり、興味や関心が向上する。
- 海外に出てみたい、行ってみたいと考える生徒が増加している。

効果測定

- アンケート、感想文の提出
- 全体報告会の実施

調整テーマ

- 交流実施時期の調整
- 交流費用の確保
- 交流内容・日程などを調整する際の、スムーズな連絡方法



専門的な授業の聴講



技術を教え合う



適切な規模での実施で、無理なく交流を継続させる

III

- 🇯🇵 広島工業高等学校 (広島県／公立)
- 🇰🇷 国立釜山機械工業高等学校 (韓国)

参加人数	送り出し：12名 受け入れ：12名
概算費用	送り出し：4～5万円 (生徒負担2万円)

交流開始のきっかけ・経緯

広島青少年文化センターに紹介・仲介してもらい姉妹校提携を結んだ。

主な内容

隔年ごとに互いの学校を4日間の日程で訪問している。広島城の見学、お好み焼き作りの体験、平和公園フィールドワークなど、広島固有の文化的な側面での交流と、マツダミュージアム見学のような普段学んでいる専門的な内容に通じる交流を、バランスよくプログラムに取り入れている。また、校内での交流としては、各科ごとの施設見学に加え、下記のような実習を共同で行っている。

- レーザー加工実習
- ロボット製作実習
- 建築実習
- 測量実習

工業高校の設備を活用した実習体験をすることで、技術者を目指す両校の生徒同士がお互いの絆を深める良い機会になっている。

お互いに、ホームステイを行っていることも、異文化の理解を深め、生徒の満足度を上げることに大きく貢献しているようだ。

効果

- 海外渡航を通して、外国への興味が増し、日常の学習意欲が強くなる。
- 外国渡航経験により、積極的な行動力と自立心が養われ、学校生活に自信を持って活動している。
- 異文化を体験し、他国と日本の違いを認識し、自他を尊重する見方、考え方を学習できる。
- 外国人とのコミュニケーションの欲求が強くなり、外国語学習への意欲がより高まる。

効果測定

- 交流行事終了後の感想文
- 参加者へのアンケートの実施

調整テーマ

- 行事費用(旅費、滞在費用、運営費等)の確保
- 受け入れ時のホームステイ家庭の確保

受け入れ

工業高校ならではの実習体験や、広島らしい体験活動を心がけて日程プログラムを計画している。体験型の活動は、生徒間の距離を縮めるには有効な活動となっている。生徒主体の内容となるよう工夫し必要な規模で実施することが、互いに交流を継続できる要因となっている。

実施スケジュール例

サンプルスケジュール(韓国研修4日間)

1日目	日本→現地へ移動 現地到着後、対面式・歓迎式 終了後はホームステイ先へ
2日目	ホームステイ先から登校 各科施設見学 実習体験 (精密・金型・造船、ロボット製作など) 昼食後、別の学校で文化交流
3日目	ホームステイ先から登校 市内視察研修 全体送別会
4日目	ホームステイ交流 お別れ会 現地出発→日本着



専門技術を通じてお互いの絆を深める機会に

4 オンラインによる交流

近年のIT技術の発達により、遠距離においてもコミュニケーションが円滑に行えるようになり、学習のツールとしても大いに活用できるようになった。インターネット回線を通してリアルタイムで相手の顔を見ながら会話ができるため、実際に海外へ行く、あるいは海外から招くことなく生徒同士がコミュニケーションを図ることができ、定期的かつ継続的な交流を低コストで実現することができる。

主な交流方法としては、下記が挙げられる。

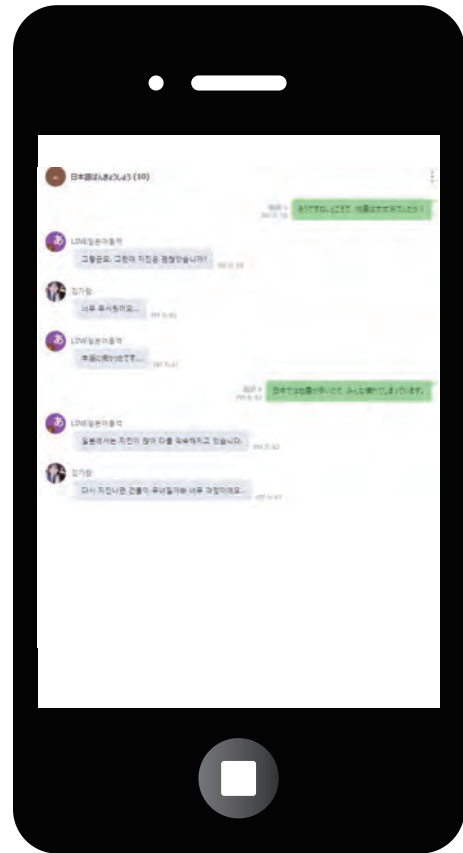
- 1 Skype™ / LINEを利用した生徒同士のコミュニケーション
- 2 WebEx®を利用した海外の授業の聴講

交流開始に当たっての窓口

- 交流希望国大使館・州政府
- 相手学校担当者

交流に当たっての注意点

- 手軽に始められるためスタート時のハードルは低いが、授業の一環として継続していくためには計画性が必要である。また、リアルタイムでコンタクトを取る場合、時差を考慮すると交流可能な国が限られる。
- 一度訪問した生徒が、その後のコミュニケーションを維持する際に特に友好的な手段である。



LINEを通じた交流



LINEを利用し、交流を継続

- 🇯🇵 秋田県立能代松陽高等学校 (秋田県／公立)
- 🇰🇷 石正女子高校 (韓国／寧越郡)

参加人数 17名 概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

寧越郡の高校生たちが秋田県を訪れた際に本校を訪問。その際に本校の生徒とメールのやり取りが始まった。石正女子高校の生徒が同校の日本語教員とコンタクトを取り、LINEを利用した交流を始めることとなった。

主な内容

幾つかのグループを作り、LINE上で情報のやり取りを行う。K-POPやドラマなどの大衆文化だけでなく、一般的な文化の違いなどについても質疑応答をする。

今後に向けて

石正女子高校の生徒のホームステイを受け入れるまで交流を深めていきたい。



児童が共同で音楽を作り、YouTubeで発信

- 🇯🇵 五條市立北宇智小学校 (奈良県／公立)
- 🇬🇧 Ysgol Gymuned Y Fali (イギリス／ウェールズ)

参加人数 84名(うち、相手国32名) 概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

ロンドンの日本人学校に勤務経験のある教員が、JAPAN UK LIVEを通じて打診した。

主な内容

両校の児童たちが共同で音楽を作り、ミュージックビデオに仕上げ、YouTubeで発信するという目標を持って取り組んだ。また、その過程でお互いの国のことを調べ学習することも行った。最終的に出来上がった楽曲を、市や県の音楽会で披露した。

効果

外国人も自分たちと同じことを考えたりしているんだ、ということを実感として捉えられるようになった。また反対に、考え方など違う部分も数多く発見できた。

5 国際貢献を通じた交流

海外にはまだ子供たちが十分な教育を受けられない地域がある一方で、そういった地域で作られた製品を私達は日々消費している。日本から外に目を向けることで、自分達の置かれている環境について改めて考えさせられ、そういった地域に対して何かしらのアクションを起こしたいと思うことも、国際交流の一つのきっかけになるだろう。

発展途上の国へ関心を持ち、自分と同年代の世界の子供たちがどのような生活を送っているかを知ることは、自分がどのような形で国際社会に貢献できるかについて考える絶好の機会である。

主な交流方法としては、下記が挙げられる。

- 1 学習用品、スポーツ用品などの寄贈
- 2 現地の小学校などの視察・交流
- 3 日本語を学ぶ生徒との交流

交流開始に当たっての窓口

- NPO法人
- 現地に精通している大学教授

サンプルスケジュール(カンボジア7日間)

1日目	日本→現地へ移動
2日目	アンコールワット視察 シハヌーク博物館視察
3日目	現地で開催されるプログラムへ参加 (考古学調査実習の現場視察) 現地NPO法人との交流
4日目	伝統文化の体験(織物) 地雷博物館見学 これまでの振り返り
5日目	現地で開催されるプログラムへ参加 (現地学校にて英語を教える) 日本人の大学生との交流会
6日目	トンレサープ湖見学(水上集落など) 市場散策 夜の便で現地発
7日目	日本着

交流に当たっての注意点

- 一過性の体験で終わらせないための継続的な取組(講演会、調べ学習、体験レポートなど)が必要
- 関心の対象を狭い範囲に限定せず、社会全体への理解を高めるよう工夫する。



途上国で現地の人々と触れ合い、NPOの活動も視察

新潟清心女子中学・高等学校(新潟県/私立)
 カンボジア(シエムリアップ)

参加人数 送り出し:8名
期間 7日間
概算費用 送り出し:20万円

交流開始のきっかけ・経緯

上智大学が主催するツアーを知ったこと。

主な内容

アンコールワットの遺跡や博物館の見学はもちろんのこと、大学生が地元の中学生をバンテアイクテイ寺院に案内して説明するツアーにも同行し、遺跡発掘調査中の現場で説明を受けた。また、NPO法人の見学、カンボジアの伝統文化体験、上智大学生が中学校で英語を教えるサマーティーチングプログラム(STPC)への参加、農村や小学校への訪問など様々な体験を行った。

効果

現地の小学生や中学生との交流や大学生との懇談会もあ

り、コミュニケーションの大切さを学ぶと同時に、カンボジアで活動する大学生の姿には大きな刺激を受けたようだった。

効果測定

- アンケート、感想文の提出
- 全体報告会の実施

調整テーマ

- 交流実施時期の調整
- 交流費用の確保
- 交流内容・日程などを調整する際の、スムーズな連絡方法



遺跡を訪れ、歴史を知る



ボランティア活動をきっかけに、 フェアトレードを通じた教育支援へ

🇯🇵 啓明学園中学校高等学校(東京都/私立)
🇰🇲 コールタメイ小学校・中学校(カンボジア/シェムリアップ)

参加人数 希望者15名

概算費用 約16万円

交流開始のきっかけ・経緯

教職員の紹介後、NPO法人を通して交流校を知り実施

主な内容

- ASAP (NPO法人アジアの子どもたちの就学を支援する会)のボランティアに生徒が参加したことを契機に、現地生徒との交流やカンボジア裁縫プロジェクトを含めたカンボジアワークキャンプを実施
- カンボジア裁縫プロジェクト“Stitches for Riches”とは…カンボジアと日本が共に豊かになれるようにという願いを込められた裁縫プロジェクトであり、カンボジアの貧しい地域の家庭に対するフェアトレードを通じた教育支援。子供の労働力に頼った農村の未就学児童問題を解消することを目的とする。
NPO法人の協力の下、カンボジアのワークキャンプを実施、カンボジアの母親が日本の幼稚園や小学校で使う布製品を手縫いし、日本で啓明学園の生徒が飾りを付け加え、文化祭等で販売
売上金はNPO法人を通して全てカンボジアの母親へ渡し、現地の教育資金として還元
- 訪問した際にスポーツ交流を行い、日本の歌などを教えている。

効果

- カンボジアの人々の温かさ・魅力について知る。
- 開発途上国の現状や教育の大切さを再認識し、感謝することができるようになる。

成功事例

- 生徒の発案によって啓明学園で募金活動を行い、その募金で購入したバスケットボールとゴールをコールタメイ小学校・中学校へ寄贈したことから、カンボジアの中学生がプレイできるようになった。
- Stitches for Richesは生徒が主体となり自発的に開始、必要な布の準備からカンボジアの母親への裁縫説明、その後日本国内での販売まで行う。

効果測定

アンケートの実施。事後学習でのコメント、報告書

実施スケジュール例

1日目	成田空港からハノイ経由シェムリアップへ移動
2日目	コールタメイ小学校を訪問 子供との交流 先生方ヘインタビュー
3日目	コールタメイ小学校を訪問 生徒へのインタビュー Stitches for Riches活動へ参加
4日目	ワットルン小学校落成式へ参加 子供との交流 Stitches for Riches活動に参加
5日目	アンコールトム及びアンコールワット観光 シェムリアップ発
6日目	ハノイ発成田空港へ帰国



裁縫プロジェクト Stitches for Riches で完成した布製品

6 授業体験・大学視察を通じた交流

高校生活のうちに経験した国際交流を一時的な体験で終わらず、更に発展させようというモチベーションを与える手段として、海外の大学の視察やその施設内での授業の体験は非常に効果的と言える。日本とは環境の違う海外の大学のキャンパスを目の当たりにすること、また、主体性を求められる海外の大学に通う学生に直に触れることで、高校卒業後の進路の選択肢の一つとして、海外大学進学を考えるきっかけとなるかもしれない。

主な交流方法としては、下記が挙げられる。

- 1 海外研修の行程の中に、大学視察を組み込む。
- 2 大学施設内で行われる研修プログラムに参加する。

交流開始に当たっての窓口

- 旅行会社の紹介
- 付属の大学の提携校

交流に当たっての注意点

- 時期によって、現地の学生が長期休暇で不在の場合がある。

サンプルスケジュール(現地視察、交流の例)

1日目	日本→ロンドンへ移動
2日目	ロンドン市内視察研修 昼食後、コッツウォルズ地方へ移動 ホストファミリー宅へ
3日目	現地高校との文化交流 コッツウォルズ視察研修
4日目	オックスフォード大学訪問 キャンパスツアーなど クライストチャーチ訪問
5日目	ホストファミリーと過ごす
6日目	ロンドンへ移動 市内視察研修 夜の便で現地発
7日目	日本着



学習意欲を刺激する広大なキャンパス



寮生活を体験しながら
イギリスの文化・歴史・
習慣に触れる

🇯🇵 日本大学豊山中学校・高等学校 (東京都/私立)
🇬🇧 Pembroke College Cambridge
(イギリス/ケンブリッジ)

参加人数 約70名 (全国25の日本大学附属校から選抜された生徒) 概算費用 約20万円

交流開始のきっかけ・経緯

日本大学がケンブリッジ大学Pembroke College Cambridgeと学術交流協定を結んでおり、その付属高校である日本大学豊山高等学校の生徒が17日間の語学研修に参加

主な内容

- 1 選抜された高校生が、現地の寮に滞在し、授業やディスカッションに参加する。
- 2 語学研修に加え、イギリスの文化・歴史・習慣に触れたり、日本大学附属高等学校の生徒同士との交流の機会にもなる。

効果

大学進学後の留学を意識するようになった。



エディンバラカレッジの
プログラムに参加

🇯🇵 京都府教育委員会 (京都府)
🇬🇧 Edinburgh College
(イギリス/エディンバラ)

参加人数 30名 概算費用 45万円 (そのうち25万までは府が補助)

交流開始のきっかけ・経緯

京都府と友好提携があったため。

主な内容

Edinburgh Collegeで開催されるプログラムに参加する。また、ホームステイ、社会見学を通して異文化を理解する。

効果

毎年一定数の生徒を派遣することで留学生の増加につながる。校内プレゼンテーション等による他生徒への波及効果がある。異文化交流により日本文化・京都の文化を再認識する機会となる。

効果の測定方法

参加生徒へのアンケート、語学能力試験受験者の数



MITやハーバード大学の大学視察・レクチャー受講 などアカデミックな内容に特化したプログラム

🇯🇵 海城中学校・高等学校(東京都/私立)
🇺🇸 St. Johnsbury Academy(アメリカ/バーモント州)

参加人数 30名

概算費用 50万円弱

交流開始のきっかけ・経緯

30年程前に民間エージェントの手配で、教員によるアメリカ学校視察を行い、St. Johnsbury Academyとの交流が始まった。それ以降、長年交流を続け、2016年正式に姉妹校として覚書に調印した。

主な内容

中学3年生が卒業時(3月下旬)に渡米。相手校生徒宅にホームステイしながら、授業体験やスポーツ交流、博物館見学などを行う。研修後半はボストンへ移動し、MIT(マサチューセッツ工科大学)でのワークショップやハーバード大学・メディカルセンターを見学、レクチャーを受けるなどアカデミックな内容を多く盛り込んでいる。過去には、短期研修に参加した生徒が、その後St. Johnsbury Academyへ編入、卒業するケースもあるなど長期留学の受け入れ先としても交流がある。また、毎年St. Johnsbury Academyの学生が日本へ訪問した際には、海城中学・高等学校へ1日学校訪問を行っている。

効果

大学視察やレクチャー受講などをプログラムに入れることで、米国留学への興味関心が高くなった。



MIT学生の話熱心に聞く生徒達

効果測定

帰国後に文集(CD-ROM)を作成し、研修内容やレポートなどを集約している。

実施スケジュール例 (年度ごとに変更あり)

1日目	日	成田空港→ボストン空港着
2日目	月	St. Johnsbury Academy 歓迎セレモニー(ウェルカムチャペル)・校内見学ツアー ホストファミリーとの対面・授業参加・部活体験
3日目	火	午前:授業参加 午後:市内観光、プラネタリウム、博物館見学
4日目	水	午前:授業参加 午後:メイプルシロップ工場見学、 バスケットボールの練習
5日目	木	午前:授業参加 午後:カルチャーフェスティバル 折り紙、書道、けん玉、ペーゴマ、 あやとりなどを紹介
6日目	金	午前:クッキング授業 午後:バスケットボール親善試合
7日目	土日	終日:ホストファミリーと過ごす
9日目	月	午前:お別れセレモニー(フェアウェルチャペル) 午後:ホストファミリー参加のフェアウェルパーティー 日本で練習した劇や歌を披露
10日目	火	ボストンへ移動 市街地観光、Fenway Park(ボストン・ レッドソックス本拠地)見学、 ハーバード大学キャンパスツアー
11日目	水	午前:MIT(マサチューセッツ工科大学) キャンパスツアー 午後:MITワークショップ参加、ハーバード大学・ メディカルセンターの見学・レクチャー
12日目	木	午前:市内観光 午後:ボストン空港へ
13日目	金	成田空港着



カルチャーフェスティバルで書道を紹介



ボストン市内観光



メイプルシロップ工場見学



30年以上の交流。 その秘訣は母体の永福高校との約束

III

🇯🇵 杉並総合高等学校(東京都/公立)
🇦🇺 Fort Street High School
(オーストラリア/ニュー・サウス・ウェールズ州)

参加人数 送り出し時: 約20名(高校1、2年の希望者)
受入れ時 : 約15~30名
概算費用 20万円(送り出し時)

交流開始のきっかけ・経緯

杉並総合高校の母体となる都立永福高校は、1986年に東京都教育委員会の推薦を受けてFort Street High Schoolと姉妹校提携を締結。1988年以降、相互交流を実施。永福高校が統廃合される際に杉並総合高校は姉妹校交流の継続を約束し、2004年の開校時には姉妹校提携を結ぶ。それ以降、その約束を守り30年以上の交流が今も続く。

主な内容

一年おきに送り出しと受入れを行う相互交流型の短期研修。期間は約1~2週間。生徒同士でパディを組み、パディの家庭にホームステイをしながら同じ授業を受ける。スポーツやレクリエーションを通じてお互いの文化や自然を体験する。

送り出し:

- ブルー・マウンテンズ等の見学による自然学習
- ザ・ロックス等の見学による歴史探索
- スポーツ大会、ブッシュダンスによるスポーツ交流
- シドニー大学見学・授業訪問による留学体験
- 日本文化・伝統芸能を英語で紹介

受入れ:

- 鎌倉や京都・奈良遠足による日本文化学習
- 琴・書道・武道等の特別授業参加による日本文化理解
- ディズニーランド遠足による交流活動
- スポーツ大会、クラブ活動参加によるスポーツ交流

効果

様々な国際理解教育を通じて、お互いの違いを認め合い尊重する態度が育成される。

効果測定

参加者へのアンケートを実施

成功事例

オーストラリアの生徒に体育祭に参加してもらった。オーストラリアには体育祭がないため大変盛り上がった。

実施スケジュール例

送り出し例

1日目	成田→シドニー
2日目	朝 到着 シドニー観光 ホストのパディとファミリーに対面 2週間のホームステイがスタート
3日目	授業体験がスタート
4日目	タロンガ動物園観光
5日目	パディとアンザッククッキー作りに挑戦
6日目	パディとブルー・マウンテン観光
10日目	お別れ会&BBQパーティ
11日目	最後の授業&ホストファミリーとの別れ
12日目	シドニー→成田



体育祭で棒倒しに挑戦



オーストラリアの授業風景

IV 受入れについて

1 受入れ型交流の現状

学校訪問を伴う外国からの教育旅行の受入れで、国際交流や日本語の習得を目的とした事案は、先述(P4)の「海外への修学旅行」

や「姉妹校締結」に比べ、前回の調査よりも増加しており、日本に対しての訪問ニーズが高まっていると言える。

①学校訪問を伴う外国からの教育旅行の受入れについて

外国からの教育旅行（引率者と生徒で構成される団体等で学校を訪問したもの）を受け入れた高等学校等（高等学校及び中等教育学校の後期課程）は、延べ1,315校（公立805校、私立481校、国立29校）である。訪問者の国は46か国・地域にわたり、台湾からの訪問者が

最も多く、11,382人、次いで韓国5,567人、アメリカ2,922人、オーストラリア2,082人の順となっている。訪問者数は延べ28,663人（平成23年度15,916人）で、前回調査より約80%増加した。

②外国からの研修旅行生（3か月未満）の受入れについて

日本の高等学校等が受け入れた外国からの研修旅行生（語学等の研修や国際交流等が目的）は、延べ4,966人（公立2,500人、私立2,362人、国立104人）である。

研修旅行生の出身国は44か国・地域で、出身国・地域別に見ると

オーストラリアが最も多く1,354人、次いで韓国772人、アメリカ675人、台湾559人の順となっている。

受け入れた研修旅行生の数は、平成23年度と比べると約58%増加した。

③外国人留学生（3か月以上）の受け入れについて

日本の高等学校が受け入れた外国人留学生は、延べ1,665人（公立449人、私立1,204人、国立12人）である。

留学生の出身国等は48か国・地域となっており、出身国等別に見ると中国が最も多く536人、次いでアメリカ149人、タイ127人、ドイツ109人の順となっている。

受け入れた外国人留学生の数は、平成23年度と比べると約30%増加した。

（上記①～③の項目の出典：文部科学省初等中等教育局国際教育課「平成25年度高等学校等における国際交流等の状況について」より抜粋）

2 外国からの教育旅行の受入れ事例

訪日教育旅行を受け入れることで、派遣型に比べ少ない費用で多くの生徒が国際交流の機会を得ることができる。相手国との相互理解の意識を高めることはもちろん、国際交流を通じた地域の振興・活性化の効果も見込める。また、この受入れをきっかけに、姉妹校提携、海外修学旅行などの相互交流に発展することもある。

相手国の学校は、語学の習得よりも「ホームステイ」「共同生活」「体験学習（日本文化）」を重視する傾向にあるため、限られた時間の中でいかに「日本を体験してもらおうか」が重要となる。交流効果は「事前学習」で高まり、「事後学習」で次回以降の充実につながる。一過性で終わらせず、継続する取組にするための工夫も必要である。

サンプルスケジュール（1日の例）

お迎え	11:00	会議室へ移動
歓迎セレモニー	11:15	歓迎の挨拶（先生） 訪日旅行団挨拶（先生） 県知事メッセージ代読 記念品交換 歓迎の挨拶（生徒） 訪日旅行団挨拶（生徒） 学校紹介
	12:00	お弁当を食べながら交流
	13:20	音楽、書道、美術、家庭、英語等 アトラクション 琴演奏、歌、踊りなど
	15:40	茶道、書道、弓道、柔道、剣道など
お見送り	16:30	記念写真

交流開始に当たっての窓口

- 各国政府機関（各国の窓口参照）
- 海外旅行代理店
- 教育旅行協会

交流に当たっての注意点

- 学年全員で来日するようなケースよりも、バス1台程度のケースが多いことを考慮し、どのような規模でどのような交流をするか、しっかり要望を伝える必要がある。
- リピーター校に対しては、同じ内容にならないよう毎年工夫が必要
- 受け入れ体制の整備など、必要に応じて行政や地域、PTAと連携を取る必要がある。



訪日教育旅行の受入れ、 和太鼓の披露

諏訪市立湖南小学校(長野県/公立)
 小主人夢想実践家日本交流訪問団(中国)

参加人数 30名 概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

訪日教育旅行の受入れに積極的な長野県の国際観光推進課から、受入れの要請があった。

主な内容

校内で和太鼓を教えていることもあり、和太鼓の披露を行った。また、給食を一緒に食べたり、坊主めくりを行ったりすることで、コミュニケーションの機会を増やすようにした。

効果

コミュニケーションが苦手だと思っていた児童たちが、身振り手振りで一生懸命伝えようとする努力が見えた。



訪日教育旅行の 受入れ、百人一首 (坊主めくり)

伊那市立西箕輪小学校(長野県/公立)
 东莞市私立光明小学(中国)

参加人数 19名 概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

訪日教育旅行の受入れに積極的な長野県の国際観光推進課から、受入れの要請があった。

主な内容

語学力に依存せずにコミュニケーションが図れるよう、折り紙で紙飛行機の折り方を教えるなど、簡単な作業を一緒に行わせた。また、日本の文化にも触れてもらうという意図で、百人一首(坊主めくり)を行った。

効果

簡単な作業を通じて児童同士がすぐに打ち解け、最後はハイタッチをして帰っていった。



学校訪問を受入れ、 異文化交流

小野学園女子中学高等学校(東京都/私立)
 Linfield College(ニュージーランド)

参加人数 25名 概算費用 0円

交流開始のきっかけ・経緯

品川区国際友好協会から姉妹都市オークランドのLinfield Collegeの生徒との交流の依頼を受ける。現在は2年に一度の受入れが定着している。

主な内容

- 2班に分かれて、日本の玩具や折り紙を使つての交流
- 英語同好会:和玩具を使つてのゲーム
 - インターナショナル折り紙クラブ:折り紙でコマを作り対戦。そのほか、両校による歌・プレゼンテーション・ダンスなど。

効果

同世代の生徒同士の交流により、お互いの国に対する興味が深まった。



「送り出し」型から 「受入れ」型に発展

成城学園中学校(東京都/私立)
 St.Norbert College(SNC)
(オーストラリア・パース)

参加人数 14名 概算費用 約43万円

交流開始のきっかけ・経緯

日本国際体験協会(EIL)の紹介を受け、教員による現地視察を経て2011年から送り出しを実施。毎年の送り出しを続けている中で、2017年は要請を受け在校生徒宅へのホームステイ受入れに発展(継続は未定)。

主な内容

送り出し:中学生14名がSNC生宅にホームステイし通学する(14日間)。出発前の事前学習=留学=帰国後学習で意識を高めた。

受入れ:ホームステイの確保は学校から生徒家庭へ呼び掛けた。

効果

海外での生活を経験することで日本のよさを理解できた。

V 交流スタート時の問合せ先一覧

オーストラリア クイーンズランド州政府 駐日事務所

URL(最新) <http://www.tiq.qld.gov.au/>

TEL 03-6841-0595

FAX 03-6841-0597

メールアドレス takashi.sato@tiq.qld.gov.au

オーストラリア ビクトリア州政府 東京オフィス

URL(最新) <http://www.studymelbourne.vic.gov.au>

TEL 03-3519-3371

FAX 03-3519-3375

メールアドレス makoto.sanada@invest.vic.gov.au
tokyo@invest.vic.gov.au

一般財団法人 自治体国際化協会シドニー事務所

URL(最新) <http://www.jlhc.org.au/ja/>

TEL +61 (2) 9241-5033

FAX +61 (2) 9241-5014

メールアドレス ホームページから問合せ

エデュケーション・ニューージーランド

URL(最新) <https://www.enz.govt.nz/>

TEL 03-5478-9653

メールアドレス japan@enz.govt.nz

在日カナダ ブリティッシュ・コロンビア州政府事務所

URL(最新) <https://bcforhighschool.gov.bc.ca/ja/jp-home-page/>

TEL 03-3516-1501

メールアドレス maoshima@britishcolumbia.ca

カナダ・アルバータ州政府在日事務所

URL(最新) <http://www.albertacanada.com/japan/jp/Study-in-Alberta.aspx>

TEL 03-3475-1171 (代表)

メールアドレス ajo@alberta.or.jp

ブリティッシュ・カウンシル

URL(最新) <https://www.britishcouncil.jp/>

TEL 03-3235-8031

FAX 03-3235-8040

メールアドレス ホームページから問合せ
<https://www.britishcouncil.jp/contact>

THE JAPAN SOCIETY (日本協会)

URL(最新) http://www.japansociety.org.uk/schools_j/educationschool-links/?lang=ja

TEL +44(0)20-7935-0475

メールアドレス ホームページから問合せ
<http://www.japansociety.org.uk/about/contact-us/contact-us/>

マレーシア大使館

URL(最新) http://www.kln.gov.my/web/jpn_tokyo/home

TEL 03-3476-3840

マレーシア政府観光局東京支局

URL(最新) <http://www.tourismmalaysia.or.jp/index.html>

TEL 03-3501-8691

FAX 03-3501-8692

韓国観光公社東京支社

URL(最新) https://japanese.visitkorea.or.kr/jpn/SEV/FU_JPN_5_1.jsp

TEL 03-5369-1755

FAX 03-5369-1756

メールアドレス ホームページから問合せ

タイ国政府観光庁 東京事務所

URL(最新) <http://www.thailandtravel.or.jp/theme/schooltrip.html>

TEL 03-3218-0355

V

交流スタート時の問合せ先一覧



平成29年7月

国際交流に係る手引き

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課

〒163-8001

東京都新宿区西新宿二丁目8番1号

電話03-5320-7772

印刷 株式会社トーヨー社

〒164-0014

東京都中野区南台三丁目44番3号

登録番号 平成29年度第71号



リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。



古紙パルプ配合率70%再生紙を使用